

ナイチンゲール教育思想の源流

日常生活は心に問いを抱かせ、知性はその問いに答えを要求する

— フロレンス・ナイチンゲール —

広島文化学園大学看護学部

佐々木 秀 美

論文要旨 ナイチンゲールの教育思想の源流を探究するために、本論ではナイチンゲール家とイギリス社会を概観した。女性の幸福と利益は男性のそれと同等であるとの考えを有した父親の政治的・学究的な態度、その父親からの高い教育は、ナイチンゲールの知性を高め、批判的精神を旺盛にさせた。ナイチンゲールは、自身の周辺で日常的に引き起こされている現象とその分析、そして分析から得られた社会的問題を現実的対応に転換可能にさせるほどに卓越した知性を有していた。さらに、両親の有した高い社会的地位と交友関係による幅広い宗教的・政治的・経済的思想及び活動による影響を強く受けたナイチンゲールの高い倫理観と相俟って、当時のイギリス社会における労働者階級の無知と貧困と病気との関係を見出した。さらに、家庭内における女性の位置づけと伝統的な女性達の生き方を非難し、家庭生活の無為さを非難し、それを受けいれている女性たちを非難し、女性であっても高い理想を持って生きるべきであると主張したものである。これらから、ナイチンゲール教育思想の源流は、日常生活における現象を原因と結果の関係において解釈しようとするイギリス経験認識論にあると考えられた。

キーワード：ナイチンゲール，教育思想，イギリス社会，ナイチンゲールの家族背景，イギリスの宗教改革

■ はじめに

時として世の中は大きな変革をもたらす時代の偉人を生み出す。“19世紀は女性の世紀”¹⁾、その言葉が示すとおり19世紀の初頭、偉大な社会改革者フロレンス・ナイチンゲールが生まれた。社会学者トレヴェリアンが、「従来の女性の社会的評価をもかえた」²⁾と述べたように、ナイチンゲールの改革は単に看護師を教育して女性が社会で有用であるようにしたばかりでなく、全ての女性の社会的有用性を示したのである。およそ、一つの思想の意義を明らかにするには、その思想がいかなる行為を生み出すかに適しているかを決定しさえすればよい。その行為こそが我々にとってその思想の唯一の意義である。ナイチンゲールは“日常生活は心に問いを抱かせ、知性はその問いに答えを求める”と述べた。長じるにつれて拡大した

彼女の疑問は解決せずにはいられないほどの人間の尊厳に関わる問題であった。事実、ヨーロッパにおける女子教育は彼女以降、大きく前進した。そして、彼女は世界の理想的人物像として不動な立場にある。そして、わが国看護教育の源流といわれる人物がフローレンス・ナイチンゲールである。わが国は彼女から多くのものを学んだが、しかし、看護に関する限り、真実の探究を怠ってきたことも事実である。その意味で『看護学統合研究』が特別に設置した“看護歴史探訪”のコーナーの最初のページを飾るべきに相応しい人物はナイチンゲールであるべきであった。筆者の看護実践現場の中で芽生えた小さな疑問に答えを求めたための歴史検証の旅、それが『歴史に見るわが国の看護教育—その光と影』³⁾である。その教育の源流とも言えるナイチンゲール思想の研究は未だ十分ではなく、宇宙的広がりをも有するが、しかし、

その一滴でも公表するべくは私の義務であると考えている。

両親の旅行中に生まれたナイチンゲールの名前は生地、イタリアのフロレンス⁴⁾に因んで付けられた。1688年の市民革命以降、資本主義社会に転じたイギリスでは、資本者と労働者間の経済的な差異に著明なものがあつた。それはわが国が身分制度を有していた江戸時代の士農工商と類似なものである。国民の10~20%が権力を有する武士階級、90~80%とも言われる庶民階級(農工商)の存在、そこには決して超えられない身分制度があつた。イギリス社会にもわが国同様、10~20%の絶対的権力を有する貴族を含めた上流社会と90~80%とも言われる労働者階級が存在し、労働者階級の貧困問題は時の政府の重要課題であつた。しかしながら、十分な策がないままに放置されていたことも現実である。そうした中で博愛主義運動と呼ばれる運動が、為政者や宗教家、貴族や上流社会の人々によって行われており、当時はベンサム主義者⁵⁾等が活発であつた。この運動は人道的な立場からの主張であり、富を有している者は経済的に困窮したものに対し、施しをする必要があるといった運動であつた。上流社会の娘として生まれ、ベンサム主義者の父親を持つナイチンゲールは、ノーブレス・オブレッジ(Noblesse-oblige)とも呼ばれる博愛主義運動に影響を受けた。母親のフランセスも上流夫人の義務として貧者や病人の家庭を訪問していた。ナイチンゲールは母親のこの行いを見たり手伝ったりするうちに、貧しい人々に関しても感じやすく慈悲深い女性に育つた。そしてナイチンゲールの周囲には両親以外に彼女の気質を刺激し、情熱を燃え上がらせ、彼女の思想、あるいは彼女の行動に影響を与える友人・知人達が多数存在したのである。ナイチンゲールが見聞した社会の、その社会との相互作用の中で、彼女が認識した社会における人々の健康問題とその問題を解決のための改革、それは彼女自身がしっかりと両足で踏んでいる現実社会の環境を観察した結果であると筆者は考えている。その意味でナイチンゲール思想について踏み込むには、最初にナイチンゲール家と、ナイチンゲール家のあつたイギリス社会を概観するのがその思想源流として必要不可欠であろう。

ナイチンゲール家の家系図^{6),7)}を見ればナイチンゲール一族についてはおおよその概略が分かる。そこで、本論では数多いナイチンゲール伝

の中から『ナイチンゲール[その生涯と思想]』⁸⁾、『フロレンス・ナイチンゲールの生涯』⁹⁾、『フロレンス・ナイチンゲール』¹⁰⁾、『近代看護の創始者ナイチンゲール伝』¹¹⁾、『ヴィクトリア朝時代の偉人たち(Eminent Victorians)』¹²⁾、『フロレンス・ナイチンゲール往復書簡集(Ever Yours, Florence Nightingale Selected Letters)』¹³⁾、『ナイチンゲール』¹⁴⁾、『フロレンス・ナイチンゲールとその家族(Nightingales Florence and Her Family)』¹⁵⁾、『女性・医療・助産婦起用におけるフロレンス・ナイチンゲールの業績(Florence Nightingale on Women, Medicine, Midwifery and Prostitution)』¹⁶⁾を手がかりにした。

■ ナイチンゲール家の家族構成とその文化的・価値背景

ナイチンゲール家の家族については後添(図1)したが、ダービーシャー州にあるリー・ホールの地主ピーター・ナイチンゲール¹⁷⁾にはアン(Anne)とピーター(Peter)という二人の子どもがいた。息子のピーターは生涯を独身で過ごしたが、娘のアンはジョージ・エバンズ(George Evans)と結婚し、メアリー(Mary)とエリザベス(Elizabeth)という二人の子女に恵まれた。妹のエリザベス(通称エバンズ大叔母)は結婚をせず、生涯を独身で過ごした。姉のメアリー(通称ショアおばあちゃん)はウィリアム・ショア¹⁸⁾と結婚し、長男ウィリアムと長女メアリー(通称メイ叔母)¹⁹⁾という二人の子どもに恵まれた。このウィリアムがウィリアム・エドワード・ショアであり、ナイチンゲールの父親である。ウィリアムは叔父のピーターに子どもがいなかったことから1815年、21歳のときに大叔父であるピーター・ナイチンゲールの財産を受け継いだ。この時から彼はウィリアム・エドワード・ナイチンゲール²⁰⁾とナイチンゲール姓を名のるようになった。これら相続の問題は女性の権利問題としては極めて重要なことであり、イギリスでは日本における家族制度同様、男子のみに相続権が認められていたことによる。つまり、女性は保護されるべき立場である。保護される立場の女性は弱者であり、自己責任は伴わない。自己責任が伴わないものには権利は有しない。ゆえに女性には財産相続権などという権利は存在しないということである。最も、上流社会では例外もあつたようだが、ナイチン

ゲール関係伝記本によれば、この相続の問題には大叔父であるピーター氏が男子への相続を遺言していたからであるとも記述されている。この相続権の問題は後にナイチンゲール自身が人生の後半で経験した家族の問題であった。

ナイチンゲール氏は成長・発達段階で、その時代に相応しい教育を受け、ケンブリッジ大学を卒業、学究的な人物となった。思想的にはベンサム主義者であり、彼はその財がもたらす社会的地位によって、当時のイギリスにおける政治的・文化的に強い影響力を与える友人を多数有していた。また、妹のメアリーはサムエル・スミス²¹⁾と結婚、長女ブランチ²²⁾、長男ショア他2人の子どもを授かった。後年、ナイチンゲール氏が死亡した後、ナイチンゲール姉妹には財産相続権がなく、父親の財産を継承したのは、この従兄弟のショアであった。しかし、彼は後のナイチンゲールの活動に大きく貢献した。

母親のフランセス²³⁾は気前が良くて金遣いの荒い派手な女性であった。フランセスは極めて精神的で、快樂を追及することにおいては飽きこそすれ、疲れを知らない女性であった²⁴⁾。彼女はイギリスで国会議員をしていたウィリアム・スミス氏²⁵⁾の娘であり、祖父のサムエル・スミス(Samuel Smith)は巨万の富を得た商人である。サムエル氏はハノーバー王朝²⁶⁾の強力な支持者でありながら、一文無しでロンドン塔に幽閉されたフローラ・マクドナルド²⁷⁾を支援した人道主義的な人物であったことで知られている。フランセスは、いわゆる上流社会における伝統的な慣習を受入れ、上流夫人としての務めを果たす女性であったが、彼女の友人の中にはファニー・アレン²⁸⁾等の様な女性解放主義者もいた。また、ファニー・アレンには二人の姪がおり、彼女たちはそれぞれ、チャールズ・ダーウィン²⁹⁾やジーン・チャールズ・レオナルド・シモンデ・シスモンディ³⁰⁾と結婚をしていた。ダーウィンは『種の起源』³¹⁾に代表される科学主義の代表的人物である。彼は女子教育については宗教家の説く女の義務主張者ではなく、それぞれの立場から女子教育を説く立場を示している。がしかし、良妻賢母主義的思想を継承しているジャン・ジャック・ルソー³²⁾の女子教育と同じ立場であり、女らしさをしつけることには積極的立場にあった³³⁾。シスモンディは当時、政治的亡命でジュネーブにいたが、ナイチンゲール一家は旅行中にわざわざジュネーブに立ち

寄り、彼のもとを訪問している。イタリア在住中、シスモンディ家から見える窓の外には常に300人ほどの乞食の群れがいた。ナイチンゲールはシスモンディと散歩をしながら、彼からイタリアの歴史や経済学や政体論などについての話を聞いた。ナイチンゲールの眼前には、自己の崇高な目的のために犠牲を惜しまないシスモンディの姿があった。ナイチンゲールは彼に対して崇拜の念と強烈な印象を抱いた³⁴⁾。キリスト教の教儀、即ち、『聖書』の範囲内で解釈されていた自然界の現象は、ダーウィンに代表されるように科学的根拠を持つものとして解釈され始めていた。また、シスモンディに代表されるように社会は変革の時代であり、ものごとの価値観も大きく変わりつつあった。イギリス社会も又、変革の渦の中にあった。

ナイチンゲールにはパースィノーブ³⁵⁾という姉がいる。彼女はギリシャのナポリで生まれたのでパースィノーブという名前が付けられた。パースィノーブというのはナポリのギリシャ名である。姉妹でありながら両者の違いは顕著であった。リットン・スチレイチー³⁶⁾は著作の中でその違いを次のように表現している。「彼女の姉が子ども部屋で、人形を引き裂くことに健全な喜びを示していた幼女時代から、なぜ、彼女は、人形を直してあげることのほうにほとんど病的な喜びを示したのか。」³⁷⁾前者が子供の探索活動であるならば、後者はいわゆる“ごっこ遊び”の世界である。前者を健全として後者を病的とするストレイチーのナイチンゲール描写にも時代の特徴的側面がある。ナイチンゲール一家の娘達二人が外国で生まれたということが実証するように、上流社会では一家で移動することは極当たり前の生活であった。それは気候の良い避暑地を求めてということもあろうが、マスメディアが発達していなかった時代には、旅行は世界の動向を知る唯一の手段であった。特にこの頃、フランスは政治・経済といった文化的側面で先進的な思想を持っていた。その為、イギリス上流社会の、特にナイチンゲール家のように政治的にも関与するような家庭では、常にフランスに目を向け、旅行によって各々知識や文化の交流を図っていたのである。この上流社会の交流の“場”の一つがサロンであった。1838年、ナイチンゲール一家は母親の姉パティ³⁸⁾の紹介によって、フランスのメアリー・クラーク³⁹⁾の“サロン”に出かけた。ナイチンゲールはこの“サロン”で初めてメアリーと知り合った。両者

はこの出会い以降、多くの点で共通の認識を持ち、理解を深め合い、無二の親友になった。メアリーは後にユリウス・モール⁴⁰⁾と結婚し、モール夫人（以降モール夫人とする）となった。ナイチンゲールが家族と共に訪問したモール夫人のサロンには、ビクトール・ユゴー⁴¹⁾、アルフレッド・ヴィクター・ヴィニ⁴²⁾、ルイス・アドルフ・ティエール⁴³⁾、フランソワ・ピエール・ギョーム・ギゾー⁴⁴⁾等の様な、当時の最も優れたフランスの政治家、文学者、科学者等が出入りしていた。ナイチンゲールはモール夫人を通してフランスの一流の名士達と出会い、彼等と交流を持つことによってフランスのみならず、プロシアやドイツの文学や思想的な影響を極めて早くから受けた。ナイチンゲールには家族背景及びその友人・知人達を通してあらゆる思想的・学術的の学びができる環境が整えられていたのである。

■ ヴィクトリア女王治世下のイギリス社会

1837年には、ナイチンゲールより一歳年長のヴィクトリア女王⁴⁵⁾が即位した。イギリスには当時、ホイッグ党とトーリー党の二大政党があった。ホイッグ党というのはチャールズ2世⁴⁶⁾に象徴される王政復古時代に組織され、初代の指導者はアンソニー・アシュレイ・クーパー・シャフツベリー伯爵⁴⁷⁾である。宗教的な要素からは国教会派である。出身階層では大地主を中心とした騎士の流れを汲む政党であり、女王の側近政党である。ヴィクトリア女王が即位した頃のイギリスでは、ウィリアム・ランブ・メルボン卿⁴⁸⁾率いるホイッグ党が内閣を組織していた。ナイチンゲールの父親もホイッグ党の党员であり、ヘンリー・ジョン・テンブル・パーマストン卿⁴⁹⁾を支持していた。トーリー党は宗教的には非国教会派、中規模の地主や新しく出現したジェントリーを中心とした政党である。メルボルン卿の後にロバート・ピール卿⁵⁰⁾率いるトーリー党が内閣を組織した。トーリー党のメンバーであったシドニー・ハーバート⁵¹⁾は、クリミア以降のナイチンゲールの、一連の改革に関して協力を惜しまなかった人物であり、彼なしでは改革は実現できなかったといっても過言ではない。クリミア戦争におけるナイチンゲールの従軍も、その瞬間に居合わせた人の、その瞬間の決断がなしたものである。クリミア戦争当時、ホイッグ党であり、ナイ

チンゲール家の隣人であったパーマストン卿が内閣を組織していた。パーマストン卿は陸軍大臣の他に臨時の戦争大臣のポストを設け、その椅子にトーリー党のシドニーを座らせたのである。

さらに、ヴィクトリア女王治世下の19世紀中期は、ダーウィンに代表されるように科学黄金時代の幕開けの時代でもあった。ナイチンゲールと年齢をほぼ同じくするこの女王の存在は、彼女の活動にとっても重要な意味を持つまでもなく、ヴィクトリア女王治世下のイギリスが、資本主義社会として文化的、経済的にも華々しい進歩をとげた時代の象徴でもある。ヴィクトリア女王はナイチンゲールが上流社会の女性として、その階級に止まらず、広く社会を見渡したように、自ら病めるものや貧民に直接手を差し伸べるなど、当時の常識の枠を越えた女王であった。

また、同年には明治維新以降、政治、教育面でわが国に強く影響を与えたハーバート・スペンサー⁵²⁾が生まれている。スペンサーはヴィクトリア朝中期のダーウィン等と共に代表的な科学者である。彼の思想は『科学の起源』⁵³⁾、『進歩について—その法則と原因』⁵⁴⁾、『知識の価値—教育論第一部』⁵⁵⁾などに明確である。彼は目的論的に言えば自然が健康のために有効な安全装置を与えてくれたのに、知識不足がこの安全装置の大半を無駄にしていると述べ、たくましい体力とそれに伴う元気とは、幸福の最大の要素であるから、その保ち方の教育こそ他の一切に勝る重要な教育となろう⁵⁶⁾と述べている。その上で、スペンサーは生理学の一般真理と、日常行為との関係を理解するのに必要な生理学のコースこそ、合理的教育の最も基礎的な部分であると述べた。日常生活と生理学、それこそがナイチンゲールが後に看護教育で示した教育内容である。中産階級の家庭に生まれたスペンサーと上流社会の娘として生まれたナイチンゲールが知り合っていた事実はないが、ナイチンゲールが時代を読む女性であったがゆえに、彼らの思想から当時のイギリスにおける科学主義的思想を知る手がかりにはなり、ナイチンゲールの教育観との関連性もまた見ることができる。ナイチンゲールが伝統的あるいは慣習的な考え方をそのまま受け入れるのではなく、社会的現象を受け止めながら、その現象をより分析的にしようとした科学的な態度を有していた。

■ イギリスにおける宗教改革と道徳的退廃

島国であったイギリスにおける宗教改革について考えるとき、非常に困難な側面がある。それはイギリスそのものの風土にある。『イングランドの宗教』⁵⁷⁾によれば一般的にイギリスにおける宗教改革はヘンリー8世に端を発するといわれているが、一概にそうとは言えないとされる。その第一にプロテスタントに対抗するローマン・カトリック教会の改革運動、第二はローマン・カトリック教会の腐敗を痛烈に批判するルター派の出現、第三には聖書中心、神の主権を強調するカルヴァン派、改革派、長老派などの出現、第四に幼児洗礼を否定し、自らの意志による洗礼による信仰告白のみを洗礼の条件とするアナバプテスト派(Anabaptist)の出現、第五に人間の倫理的問題を強調し、キリストをその範とするヒューマニスト派の出現、第六にヘンリー8世の役割が強大であった⁵⁸⁾ ことなどが複合的に絡み合った問題がイギリスの宗教問題である。

キリスト教主義思想であるヨーロッパでは宗教の教えは絶対であった。イギリスはローマ支配下にあった時代から政治的には独立していたが、宗教的にはローマの支配を受けていた。ローマを中心にしたキリスト教という巨大宗教は国際的なものであり、例え、国王であってもその教えには絶対的に従属しなければならなかった。しかしながら、15世紀の初頭、ヘンリー8世⁵⁹⁾は自身の離婚問題からローマン・カトリックと対立した。ヘンリー8世は信条的には、ローマン・カトリックの教義をそのまま受け継いだ形で長年のローマ支配を断ち切り、自らイギリス国教会を作り、その長になった。ヘンリー8世によって宗教改革が行われたとは言え、教義そのものが深く研究されないまま、イギリスの宗教は存続した。そして、国教会による宗教の一元化は土地の基本財産と教会税に支えられた特権階級の牧師職を作り出した⁶⁰⁾。そしてドイツではマルティン・ルーテル⁶¹⁾の宗教改革によって新しくプロテスタント(Protestant)という宗派が出現し、イギリス社会にも浸透し始めていた。その後、イギリスではより『聖書』に忠実であろうとするピューリタン(Puritan)と呼ばれる宗教活動も登場した。その後、民衆の宗教離れを背景に登場したのはバプティスト(Baptist)とクエーカー(Quaker)である。バプティストはジョン・スミス⁶²⁾によって1609年に設立され

た。彼らは幼児洗礼を否定して、成人にのみ洗礼を施そうとする宗派である。クエーカーはジョージ・フォックス⁶³⁾によって1643年に設立された。彼らは牧師の専門性や階層性を認めず、いかなるシンボルも sacrament(洗礼・聖餐・婚姻など)も祭壇も音楽も不要であるとした。そして、彼らは教会や聖書の外的権威より、自己の内なる神の権威に従おうとする態度を表明し、人間の完全なる精神的平等性を導き出した⁶⁴⁾。ヘンリー8世の娘、エリザベス女王⁶⁵⁾はヘンリーの改革路線を全て無効にした。そのことにより一時的にイングランドの宗教改革は頓挫した⁶⁶⁾。エリザベス女王は神学的統一を強要するより、カトリック派とプロテスタント派の中庸を図ろうとした⁶⁷⁾のである。しかしながら、この計画は失敗に終わり、エリザベス女王はローマ教皇によって完全に破門され、ローマ・カトリックとの関係は断絶した⁶⁸⁾。この宗教的・社会的・政治的変動はプラトン主義の新たな復活を促した。その代表的人物がフランシス・ベーコン⁶⁹⁾である。彼の思考方法は人間理性の働きに基づく経験論的認識論である。その後、真理と善なるものとは究極的に一致するとの立場を探究するケンブリッジ・プラトニスト(Cambridge Platonists)たちが出現した。彼らはプラトン主義とキリスト教とを結びつけ、宗教的対立を解決する手段にしようとした⁷⁰⁾。ジョン・ロック⁷¹⁾の哲学は経験論的認識論の立場であるが、この立場である合理主義的思考が、哲学の分野から自然科学の分野に広がるにつれて、伝統や宗教的制約から脱却して個人の合理的な主知主義的判断に基づく自由の要求が高まった⁷²⁾。

このような思想的な流れの中でナイチンゲールの時代、イギリスにおける宗教は、ローマン・カトリックとイギリス国教会、ユニテリアン(Unitarian)⁷³⁾それにルーテルの宗教改革によって設立されたプロテスタント、ピューリタン、バプティスト、クエーカーという宗派が存在したことになる。これら多くの宗派の存在は、19世紀イギリス社会の価値規範の多様性を示しているが、他方、宗教的混乱を招き、道徳的退廃も著しかった。激しい宗教闘争に疲れた人々は、次第に宗教から離れ、無関心となり、沈滞ムードになっていた⁷⁴⁾。上は『ヴィクトリア女王』⁷⁵⁾から、下は『イギリスにおける労働者階級の状態』⁷⁶⁾にも記述されているが、当時のイギリス社会では人々の倫理観の低下が顕著であった。『ヴィクトリア

女王』によれば司祭はその儀式も十分に取り仕切れないほどであり、全ての階級に宗教上の問題があった。それぞれの信仰がもたらす価値規範は互いを認め合うというより、対立関係であり、いわゆる宗教戦争にも近い状況であった。が、しかし、それぞれの教義に従って教育が振興したのも事実である。道徳教育の必要性が問われた19世紀初頭に公教育が開始されたのもこれらと無関係ではない。ストレイチーの『ヴィクトリア朝時代の偉人たち』の一人アーノルドのラグビー校⁷⁷⁾における改革も、基本的には宗教的要素を強化した道徳教育である。また、道徳教育の一環として幼児教育を開始したのはロバート・オーウェン⁷⁸⁾である。オーウェン『自叙伝』⁷⁹⁾には、ナイチンゲールの祖父であり、国会議員であった若かりし頃のスマス氏についても記述されている。つまり、それはオーウェン自身が、スマス氏を認識していたということであり、ナイチンゲール一家と当時の政治的・思想的に代表的な人物との横のつながりを示している。

こうした時代、更にダーウィンの進化論が発表され、科学主義時代が幕開けするのである。

■ ナイチンゲールの知性を育んだ父親からの教育

ナイチンゲールの時代、イギリスでは公教育として義務付けられた学校教育はなかった。寄宿舎付きのパブリックスクールやグラマースクールも存在したが、それらは男子に準備されたものである。女子に対してはナイチンゲールのような上流社会の子女達のみが、ある一定期間家庭で教育された後、無秩序な寄宿舎付きの私立学校で教育された。その教育は礼儀作法や音楽、ダンス等社交界に必要な教育および家政的な教育が主流であり、その内容も一貫していなかった。上流階級の子女さえこの様な状況であったから、労働者階級の子供達には教育らしい教育が存在せず無学なものが多かった。

ジェレミー・ベンサム⁸⁰⁾の「女性の幸福と利益は男性のそれと同等である」⁸¹⁾との考えを継承していたナイチンゲール氏は、娘達に男性同様の教育を施した。姉のパーシノーブと違ってナイチンゲールは、生来勉強する事が好きであった。大きくなるに連れ、父親からは哲学や数学、ラテン語、ギリシャ語、イタリア、ドイツやフランスなどの歴史を教わり、数学に関しては、当時一流

の数学者であったジェームズ・ジョセフ・シルベスター⁸²⁾に個人教授をしてもらった。それに加え、統計学者としても一流のアドルフ・ケトレ⁸³⁾や医学統計学者ウィリアム・フォー博士⁸⁴⁾にも個人教授をしてもらった。ケトレは幾何学の博士号を受けた数学者であり、ゲント大学やブリュッセル学術協会で高等数学を教え、ブリュッセル博物館で物理学や天文学を教えていた⁸⁵⁾。いずれにしろ、彼らから受けた統計学教育は後にナイチンゲールをして統計学者たらしめた。そして、ナイチンゲールの後の改革にはこの統計の知識がいかに発揮された。ちなみにナイチンゲールは1874年に、アメリカ統計協会の名誉会員になり、統計分野における国際的榮譽を受けている⁸⁶⁾。

とにかく、ナイチンゲールという女性は知的探求心が旺盛であった。ナイチンゲールが受けた男女を問わない、あるいは当時の男性以上の高い教育は、その当時の上流社会の子らしく知的に育っていくには相応しいものであったが、ナイチンゲールの場合、当時の上流社会の女性達とは違った生き方を模索する事になる。即ち、知識は単なる知識ではなく、行動するために必要なものであった。そしてその知識は、今日起きている現象をそのまま受け入れるのではなく、科学的な根拠を持って物ごとを観察し、認識し、行動変容するために必要であった。そして、ナイチンゲールの姿勢は現実の社会における矛盾点を指摘、改革しようとする積極的な態度につながった。後にナイチンゲールは「生活は心を目覚めさせて問いを抱かせ、心は知性を目覚めさせてその問いに答えを要求する。」⁸⁷⁾と述べている。非常に含蓄のあるこの言葉はオーギュスト・コント⁸⁸⁾の言葉を引用したとナイチンゲール自身が述べている。

家庭内における教育は彼女に知性をもたらし、その知性は当時の神秘的なキリスト教教義の中で、自分が何をなすべきかについて考える機会を与え続けた。『思索への示唆』⁸⁹⁾でナイチンゲールは、多くの哲学者や宗教家たちの考えを引用しながら、人類の宗教と道徳哲学に対して説明を試みている。かつてコントは「女性は知的作業には極めて不適格」⁹⁰⁾との意見を述べ、それは知性の内在的な弱さのせいであると説明を加えている。コントは、女性は知性の内在的弱さの為に知的作業にはふさわしくないと結論づけたが、ナイチンゲールはこの見解を崩す人物であった。ナイチンゲールは「なぜ、女性は男性のように抽象的概念

を理解する事ができないのか。なぜ女性たちは男性と比較して創造性に欠け、知性に欠け、自己決定ができず、宗教的感化も少ないのか、何故、女性たちは芸術や科学あるいは文学の世界で一つの業績も果たすことができないでいるのか？」⁹¹⁾と指摘した。なぜ？なぜ？何故？このナイチンゲールの疑問は1846年のことであり、ナイチンゲールが父親に宛てた手紙の一節である。なぜ、女性は男性のように抽象的概念を理解する事ができないのか。彼女自身の磨き上げた知性から考えた場合、自分以外の女性たちの無知が信じられなかったのであろう。女性たちは男性と比較して創造性に欠け、知性に欠け、自己決定ができず、宗教的感化も少ないと指摘し、何故、女性たちは芸術や科学あるいは文学の世界で一つの業績も果たすことができないでいるのかと疑問を投げかけた。その疑問は知的好奇心となって自らの疑問に答えを出すかのようにナイチンゲールは行動した。そして、行動するたびに新しい課題に直面した。

向学心の強かったナイチンゲールの知識はこの頃、当時の女性たちあるいは男性たちをも遙かに上回るものであったことが伺える。特にギリシャについてのナイチンゲールの洞察力は素晴らしいものがあつたらしい。オックスフォード大学⁹²⁾のギリシャ語教授ベンジャミン・ジョウエット⁹³⁾がプラトン⁹⁴⁾の『対話集』を改訳する際に、ナイチンゲールに手助けを依頼したことや、神秘主義⁹⁵⁾とプラトンのイデア論⁹⁶⁾との合体論の正当性等について、ナイチンゲールとジョウエットが語り合ったと『フローレンス・ナイチンゲールの生涯』には述べられている⁹⁷⁾。ジョウエットが1871年に公開した『対話集』はナイチンゲールの注釈を多く取り入れたとされる⁹⁸⁾。神秘主義とプラトン主義の影響を受けたとされるのがトマス・アーノルド⁹⁹⁾とサミュエル・コールリッジ¹⁰⁰⁾である。アーノルドは19世紀イギリスの宗教改革を二分する人物であり、ストレイチーの『ヴィクトリア朝時代の偉人たち』の4人のうちの一人である。コールリッジは人間の経験を、理性と悟性、意志と自然、主観的真理と客観的真理という三つの対の概念で理解しようとした¹⁰¹⁾。彼らは19世紀初頭のイングランド思想界に多大な影響を与えた人たちである。勉強熱心であったナイチンゲールもまた、彼らの哲学に学び、ジョウエットとの語りあいの中から多くを学んだことであろう。しかし、後年、ナイチンゲールは見習い生達に自分

の無学と愚かさとを毎日毎日感じている¹⁰²⁾と述べている。

■ ナイチンゲールの宗教的感化

ナイチンゲールの家庭は基本的にはユニテリアンに属していた。ナイチンゲールの宗教観については『ナイチンゲールの宗教観に関する若干の考察—友人アーサー・ヒュー・クラフとの関わりをてがかりに—(その1・2)』¹⁰³⁾で論じたように、彼女の立場はカソリックであるとか、プロテスタントであるとか、イギリス国教会であるとかではなく、キリストの教え、即ち、『聖書』を原点として学ぼうとする考え方であった。ナイチンゲールの友人であり、彼女の従姉妹ブランチと結婚したアーサー・ヒュー・クラフ¹⁰⁴⁾も宗教上の問題では多くの疑問を抱いていた。ナイチンゲールにとって当初、問題であったのは少なくとも宗教における男女の解釈であり、彼女の将来の選択に大きく影を落としそうな問題であった。いかに『聖書』が解釈されようとも広義にはキリスト教の範疇である。ヨーロッパの多くの国がキリスト教国であり、伝統的にはキリスト教の教義が慣習として受け入れられていた。ナイチンゲールの望んだ理想的生活、それはキリストの教えを実践する神の僕としての生き方であった。これは彼女の著作『看護覚え書 (Note on Nursing)』¹⁰⁵⁾、『女性による陸軍病院の看護』¹⁰⁶⁾、『カイゼルスウェルト学園』¹⁰⁷⁾等が、宗教的な概念に満ち溢れている事からも、彼女がキリスト教の影響をかなり強く受けていることは明らかである。

ナイチンゲール関係伝記本によれば、ナイチンゲールは極めて早い時期から神の啓示を受けたと記されている。ナイチンゲールは生地イタリアを深く愛し、長じてからも度々、家族と共にイタリアに旅をした。その生涯史にはイタリアの解放運動に熱狂的な関心を示した様子が示されている。そしてイタリアへの感心は自己の宗教観にも影響を与えるようになる。ナイチンゲール家は家系的にはユニテリアンの家庭であったが、ナイチンゲールは実践的にはイギリス国教会に属していた¹⁰⁸⁾。しかし、彼女はイタリアを中心に広まったローマン・カソリック (Ro・man Catholic) にも関心を示し、当時のイギリス社会におけるキリスト教の解釈に疑問を感じたりもした。1846年、ナイチンゲールがモール夫人に宛てた手紙には

「天地創造の物語を主題とする古いイタリアの絵画は、見えざるものが最上階に君臨していたもうことを明らかにしています。その背景の上方には永遠の父なる神の影がおぼろに映っており、はるか下方に人間どもが住んでいるのです。でも人間は下方にいながら最上階とつながりを持っています。」¹⁰⁹⁾と述べ、見えざる王国が見える王国と自由に交流していることを語る類の本が好きであると述べている。天界との交流ができるとして神秘主義的な立場から多くの著作を書いたのはイマヌエル・スエデンボルグ¹¹⁰⁾である。彼は『天界と地獄』¹¹¹⁾あるいは『結婚愛』¹¹²⁾など多数の著作を著した神秘主義者である。彼は天界に行くことができ、天使たちと語りことができ、霊界のことや霊魂について語りことができ、内なる魂も含め、全ての事象について示すことができる人物であった。「美しく穢れのない器（内なる自己）には神が宿り、神が語りかけるとしてスエデンボルグの器はきれいであった」¹¹³⁾とナイチンゲールは述べ、キリストの教えに忠実であろうとするナイチンゲールは信仰こそが魂の真の目であり、耳である¹¹⁴⁾と述べた。ナイチンゲールは古いイタリアの絵画から不思議で幻想的な世界を感じ取り、著作から目には見えない神秘的な信仰の世界を感じ取ったのであろう。彼女は本当に見る目を与えられるとき、神はすぐ身近におり、失われたと思うものもすぐそばに存在しているのだから、神の身元に行く必要もないのだと感じた。これはナイチンゲール自身が日常生活で感じていた心の揺れや宗教に関する心の揺れの中で、神の存在を感じた瞬間であり、日常生活の様々な現象が神との一体感の中で生まれるものであると感じた時でもあったろう。彼女の導き出した結論は、真実の目は真理の探究につながることであった。それはまた、当時の宗教に対する社会の認識を否定し、キリスト教を受け入れながらも、彼女独特の宗教観を生み出す契機にもなったであろう。この宗教観は各宗派を越えたものであり、キリスト教の原典を聖書に求め、聖書に学ぼうとする考え方である。多感なナイチンゲールに影響を与えた人々、それは彼女自身が求めた交遊関係、つまり、スチレイチーが『ヴィクトリア朝時代の偉人たち』で筆頭に掲げた人物であるヘンリー・エドワード・マニング¹¹⁵⁾大司教や、フランス修道女会のバーモンゼイ¹¹⁶⁾修道院長等の様な人物との交流が彼女の宗教観に大きく影響を与えたのである

う。ナイチンゲールの宗教に関する考察は後に『思索のす峻』¹¹⁷⁾にまとめられたが、後にストレイチーに酷評された¹¹⁸⁾。

■ イギリス労働者階級の実態

イギリスにおける産業革命は、イギリス社会の文明化に貢献したが、他方、豊かな資本家と貧乏な労働者との差を著しくした。そして資本主義社会における工場への機械の導入は、多くの子供や婦人達をその労働従事者として組み入れ、病んだ部分をも大きく表面化させた。イギリス第一のニュー・ラナーク紡績工場の総支配人であったオーウェンは、自己の工場経営の傍ら、労働者の状態改善に努めていた。彼は1816年に働く母親の為に工場内に保育施設を設けた。そして1～6歳の子を収容して、ジョハン・ヘンリック・ペスタロッチー¹¹⁹⁾の教育精神によって幼児教育を開始した。オーウェンは“工場法”の成立にも奔走した人物である。彼は、社会の正しい目的は、人間の肉体的・道徳的・知的な性格の改善にある¹²⁰⁾と考えていた。その性格改善は経験する苦痛を最小に、よろこびを最大にするのが最も良い方法で行うべきであった。しかし、彼の見解では社会の現在の仕組みはそのようにはなっていないし、労働者たちは将来の見通しもなく、不健康で気の進まない労働に従事しながら、生活必需品のほとんどが入手できない状況にあった。

オーウェンの思想はサン・シモン¹²¹⁾、シャルル・フーリエ¹²²⁾等と共に空想的社会主義¹²³⁾と呼ばれ、マルクス主義思想の原点となっている。オーウェンを継承している者はオーウェン主義者と呼ばれ、当時はジャイコブ・ホリオーク¹²⁴⁾等が代表的であった。ナイチンゲールも実際、1850年の時点でこのホリオークを友人に持ち、労働者階級の人達と接触を持っていた。『フローレンス・ナイチンゲールの生涯』には、1852年の一年中ロンドン市内に出没する“謎の貴婦人”¹²⁵⁾というのが実は、ナイチンゲールであったと書かれている。

ナイチンゲールが20歳になった1840年は、彼女にとってその生涯の意志決定の年であったといっても過言でない。それはナイチンゲール家の隣人であるパーマストーン卿宅に招かれた時、同時に招かれていたアシュレイ卿から、貧しい人々の状況を改善・改良をするために自分の全生涯をかけていることを聞いたことによる。アシュレイ卿とい

う人は炭鉱に調査団を送り、1842年に“炭鉱法”を成立させた事でも有名である。1833年に人道主義的な見地から児童の長時間労働を制限しているが、1847年に成立した“10時間労働法案”は婦人にもその枠が拡大された。1844年にアシュレイ卿の“10時間工場法案”に付いての下院での演説は、カール・マルクス¹²⁶⁾の『資本論』にも引用されている。1867年に著した『資本論』の中でマルクスは、機械が従来必要としていた筋力を不要にし、代わりに機械は筋力のない労働者、即ち、婦人および児童をその筋力労働の代用物にし、たちまち、性や年齢の区別なく資本者側の直接的統治に編入させた¹²⁷⁾と述べた。機械の導入は安易な労働力を生み出す結果となり、女性のみならず幼児までが労働者として工場に駆り出されたのである。その上、この労働は機械を休ませない為に昼間労働、夜間労働の交替制を取っていたから、12時間から18時間という長時間の労働が課せられ、労働者達は“白色奴隷”と命名される程の状況下で、事実上、死ぬまで働かされた。過度の労働に加え、工場の内部は換気が悪く日もささず、食事も満足でなくほとんどのものが栄養失調となり、多くの者が健康を害した。公衆の場としての職場環境の悪さ、個人の健康面での体力の低下は、猛威を振るって暴れ回る伝染病に対し無抵抗であった。そして、この状況を改善しようとする者は存在したが、事があまりにも重大かつ複雑な様相を呈しているだけに、実際に改革に着手する者はいなかった。ナイチンゲールは後年著した『看護覚え書』に、労働者の現実も含めた人々の健康問題を多角的に論じた。

労働者の状況改善については、為政者のみならずマルクスやフリードリッヒ・エンゲルス¹²⁸⁾等の様な社会主義者によっても指摘され、経済的・教育的な側面から改革がなされようとしていた。エンゲルスは1844年に『イギリスにおける労働社階級の状態』¹²⁹⁾を自己の観察に基づいて綿密に書いている。彼は一部の貪欲な資本家のあくなき利潤追及のために、いかに労働者が過酷な状況に置かれていたかを、多くのケースを紹介しながら分析を加え、辛辣に批判した。彼等の住まう住居の劣悪さ、貰っている賃金の低さ、着替える服もなく、汚れた体を洗う水もなく、食べ物を買うに十分なお金もなく、一度たりとも満腹感を感じるほど食べたこともなく、子供達は十分に保護もされないで栄養障害で成長障害を起し、骨は曲り、病死や事故死で死亡する事が多かった。エンゲル

スは「イギリスの大都市ほど多くの子供が車に轢かれたり、馬蹄で蹴り上げられたりするところはないし、又、溺死したり、焼死したりするところはない。」¹³⁰⁾と述べている。さらにディケンズ¹³¹⁾も救貧院の惨い取り扱いに対し『オリバー・ツイスト』¹³²⁾で痛烈に批判した。

ナイチンゲールが貧しい人々に対する問題に関心を持った事を知ったアシュレイ卿は、後にナイチンゲールに労働階級の状況を調査した政府報告書と病院に関する報告書を手渡した。この報告書に目を通したナイチンゲールは、自分も何か社会で役に立つことはないかと考えるようになっていた。貧民救済に関する運動は博愛主義運動として知られているが、この運動は産業革命の落とし子的人格を持っていた。つまり、一方の繁栄に比較して他方の経済的な破綻は都市をスラム化し、暴力や犯罪の温床ともなった。こうした人々を救済しようとして宗教家を中心として始まったのが博愛主義運動である。この運動はナイチンゲール家が属する上流社会のみならず、政治家や文化人達の関心事でもあった。ナイチンゲールは当時のイギリス政界達の大物政治家達と交流することによって、次第に自分の理想とした生き方が、通常 of 伝統的な上流社会の婦人としての生き方とは違う方向に傾き、そして、その気持ちが次第に高まって行くのを感じていた。

■ ヨーロッパにおける伝統的な女性の生き方と義務

自然（神）は女性に生む機能を与えた。男女が結婚することによって新しい生命が誕生し“種の保存”が保たれる。こうした生物学的な考えからでなくても対立する二つの因子、即ち“男”と“女”の二組しか存在しない世界の中で女性達は、自然が彼女たちに与えたその機能によって、その役割を果たすのが務めであると考えられていた。つまり、生物学的に言えば子宮という臓器は子供を宿すための究極の機能であり、それは女性にしか授けられていない。ゆえに女性は神から与えられたその機能によって子供を宿し、子供を生み、子供を育てるのが当然の役割であり、義務であると考えられた。『旧約聖書』には「一人でいるのは良くない、彼のために相応しい助け手を送ろう。」¹³³⁾と、男性の肉体の一部である肋骨から女性を作ったのだ。男性の一部である肋骨から作られた女性は男性の一部分である。ゆえに、女性は男性に従属す

るものとして考えられた。

更に楽園追放の章では“禁断の林檎”を食べた事から神の怒りに触れ、言いつけを守らなかった一对の男女に罰が与えられる。「私はあなたの生みの苦しみを増す、あなたは苦しんで子を生む、それでもなおあなたは夫をしたい、彼はあなたを治めるであろう」¹³⁴⁾と書かれている。神が一对の男女に与えたその罰が、男性には労働の苦しみ、女性には生みの苦しみである。そして、男性を誘惑する邪悪な女性から生まれた子供は、元来邪悪な性質を持って生まれるという概念が通念であった。これが一般にキリスト教における源罪主義の思想として知られ、一方では“性悪説”とも言われている。『新約聖書』になると「妻たるものよ、主に仕えるように自分の夫に仕えなさい、夫も自分の身体の一部のように妻を愛しなさい。」¹³⁵⁾と男女は相思相愛であるように説かれるが、男女間の従属関係は同様である。

キリスト教以前の『ギリシャ神話』の中にも女性が邪悪であるという記述は見られる。例えば、「この女のお陰で、数限りない悪疫や災禍が世に横行し、人間を夜となく昼となく襲って、一時の憩いも与えないようになってしまった。」¹³⁶⁾という記述や「あの恐ろしい女の種族、死すべき人間のやからの間に住んで、大いなる災いを彼等にもたらし、おぞましい貧困においては道連れにならず、富と充足においてだけ連れ添う。そして働き蜂の雄蜂が一日中せっせと蓄えた蜜を、巣に怠けていて腹一杯に食う。その雌蜂と同様な女を、人間どもの災いとして、ゼウスは遣りこされたのだ」¹³⁷⁾という文章である。神話の世界における女性に対する評価の低さは、当時の女性観を表しており、女性の尊厳は認められていなかったことを示している¹³⁸⁾。

『聖書』における男女の従属関係および男女の役割はその後、何者も動かし難い律法として社会に君臨した。その為、女性は家の中での役割以外には何もできないと考えられた。キリスト教社会では女性に教育を与えると男性のいう事を聞かなくなるから、女性に教育をする必要はないというのが長い間の社会の通念となった。ノルベルト・エリアスの『文明化の過程』¹³⁹⁾によれば、ヨーロッパにおける宮廷生活の中で、騎士道における“礼節”から“礼儀作法”への教育の転換が1500年代に行われている。イギリスの市民革命に大きな影響を与えたロックは哲学者でもあり、医師でもあった。ロックの主張「健全なる肉体における健

全なる精神」¹⁴⁰⁾は子供の健全育成の主要概念である。ロックの思想はギリシャ時代の思想を取り入れたものであるが、我々の意識の背後に実態的な魂というものがあるとする信仰をすなおに許容した¹⁴¹⁾。ロックはオリンピア時代の強健な肉体づくりを思想的根拠におき、ギリシャ哲学を導入、理性の教育を主張したのである。この主張以降、キリスト教中心であった思想の流れが大きく変わり、教育のルネッサンスを迎えたと言われたほどであった。しかし、ロックの主張した教育も、基本的にはイギリス上流社会の紳士達のために書かれたものであり、女性に関しては教育の必要性は説いていない。作法から礼節、そして子供の健全育成から女子教育へと時代は変わりつつあった。紳士教育、すなわち、男子の教育が主流のヨーロッパで、フランソワ・ド・サンヤック・ド・ラ・モード・フェヌロン¹⁴²⁾によって新しい女子教育論が主張された。

フェヌロンはフランスの聖職者作家であり、1681年に『女子教育論』¹⁴³⁾を著した。その中で彼は当時優勢であったキリスト教の思想、男女の従属といった規定概念の中で、女性に知的探求心を授ければその夫に理屈を捏ねる事のみを覚え、夫に従うことができなくなるから、女性に教育を授ける必要はないという従来の考え方を否定し、子供を育てる女性こそ教育されるべきであると主張した。彼は新カトリックの長としてプロテスタントの子女をカトリックに改宗する事、また既に改宗した子女達を再教育する事を任務としていた。フェヌロンは「女の子の教育ほどなおざりにされているものは何一つない。そこでは慣習と母親のきまぐれとがしばしば全てを決定している」¹⁴⁴⁾と述べ、女子教育の必要性を説いた。女子教育は当时无知な母親による教育か、あるいは修道院に預けて教育を受けるかのいずれかであったようだ。フェヌロンは、女性は普通男性より一段と柔弱な精神を持っており、その精神と同様、彼女達の身体もまた、男性のそれほど強壯でもなければ、頑健でもない。けれども、その埋め合わせとして、自然は、彼女達に器用さ、清潔さ、儉約さをわけまえとしてあたえた。これは、女性達が家庭内で静かに仕事をするためである¹⁴⁵⁾と述べ、軟弱な女性達は、男達と同様に戦場にでる必要もなければ、工場において労働をする必要もなく、ただ家庭内で家事を切り盛りするのに相応しくできると述べた。

このフェヌロンの教育論が本格的な良妻賢母主義教育の発端であると考えられている。フランスでは、国王ルイ14世¹⁴⁶⁾の、内密の無冠の王妃といわれたマルキュイズ・マントノン¹⁴⁷⁾が、フェヌロンの影響を受け、上流社会の娘達に教育を開始した。イギリスでは、フェヌロンの女子教育論をハンナ・モア¹⁴⁸⁾が実践した。彼女の教育は福音主義の立場であり、極めて厳格なものであった。福音主義とは『聖書』の教えを忠実に実践しようとする立場である。彼らの思想は宗教的拘束を受けられ、公共の精神が持てるよう、上流階級は富や権力への欲望を捨て、下層階級は貧困であってもそれは神から与えられた試練であるとして甘受し、それぞれの地位に満足せよ。そうすれば社会の道徳が向上するとの考えであった。イギリスでは慈善学校や日曜学校という形で教育がなされ、主として良き家庭人となる、つまり、良妻賢母主義が女子教育の主流となった。ナイチンゲールの時代には、父親によって娘の結婚相手が決まり、好むと好まざるに拘らず女性は結婚するものと決められた。

18世紀後半、ロックの理性教育論を女性にも適用しようとしたメアリ・ウルストンクラフト¹⁴⁹⁾は、女性に対して教育を与え、精神的にも経済的に自立させる事が女性の悲惨な状況を克服する事に繋がると考えていた。19世紀には、ハリエット・マーティノウ¹⁵⁰⁾、ハリエット・テラー¹⁵¹⁾やシャーロット・ブロンテ¹⁵²⁾の様な女性文筆家達は女性の権利を主張しはじめた。彼女たちに加え、イギリス人でありながら、アメリカで初の女性登録医となったエリザベス・ブラックウエル¹⁵³⁾などの極少数の女性達以外には、権利に関して男女間に差異があることに気づいていなかった。ナイチンゲールが、当時の女性達と同じようには生きられないという考えを持ったのは極めて早い時期であった。が、明確な形で看護師になろうと考え、意志表出をしたのは1841年であった。ナイチンゲールが看護師になりたいことを家族に打ち明けて以来、家族との対立は激しかった。なにしろこの当時、看護師と言えば“売春婦”と同じような意味にとらえられていたのである。上流社会の当たり前前の常識を持つ家族との対立はひどく、彼女はいろいろな方法で、家族との合意点を見つけ出そうと苦しんだ。

■ ナイチンゲール自身が経験したイギリス社会

【女性には自己決定権がない】

今日女性のライフスタイルも変わりつつある。自分らしく生きる事、これは誰にも与えられた権利である。その“らしさ”の持つ意味も、多くが個人の価値観で決まるものであり、それが集会的には社会的に認識された価値観となる。

ナイチンゲールが一人の人間として目覚め、どのように生きてよいかに悩み、自己の信念を貫きたいと考えた時、上流社会の慣習と伝統的な性役割は大きな壁であった。ヨーロッパにおける伝統的な社会規範によれば、女性は家庭内にとどまるべきであった。そして長い間、受け入れられてきた家庭内における女性の役割は強固なものであった。ナイチンゲールは自分の知性を活用して働きたかった。幸福の概念は個々に違う。誰もが良い住居に住み、良い服を着、良いものを食べたいと願う心境同様、当時の子女たちも今の自分よりできるだけ良くなりたいと願っていたであろう。ナイチンゲールが恵まれた環境を否定し、女性の伝統的役割を否定し、しかも労働者階級のように働きたい、しかも看護師などという呪われた仕事を選ぶなどという事は、家族にしてみれば理解しがたい考えであった。その為、家族との対立はひどく、いろいろな方法で合意点を見出そうとナイチンゲールは苦しんだ。そして反発もした。憧れや希望、当て外れや失望などは全て手帳のなかに注ぎ込まれた。個人に与えるストレスはその強さと期間によって本人の心に大きな打撃を与える。長期間にわたる家族の執拗な反対はナイチンゲールの神経をすっかり磨り減らしてしまった。彼女はベッドに伏せる事が多くなった。

ナイチンゲールの繊細な神経と洞察力は鋭く女性達を観察した。女性達が貧しい生き物になっていると指摘し、母親達に目覚めよと呼びかけた。それは男性に従属する人生ではなく、自分の為に生きる人生であり、精神的、経済的に自立した女性になることである。ナイチンゲールが求めて止まなかった理想な生活、それは自分の理想を追及する事であり、自己実現である。その理想というのは無為に生きている女性達を有徳にすることであった。更に、自分と同じ様に精神的危機に陥っているかも知れない他の女性達を救済する事でもあった。それは従来のキリスト教の教儀であった男女観の役割を打ち破るものでもあった。彼女の

考えの中に“神への奉仕”が基本的にあった。その奉仕のあり方は神の僕として看護活動に邁進することであった。そしてその信念を貫くことこそが神との精神的な結合であって、最も崇高なものであった。

ナイチンゲールは『見習い生への書簡』の中で、“寄生生物”について触れている。彼女は「私たちは、植物や動物で、他者に寄生して生活し、自分の植物のために自分で働かないで、そのうち退化して行く“寄生生物”がどんなものであるか知っています。」¹⁵⁴⁾と述べ、こうした寄生虫のような人間にならないようにしようと忠告している。貴族階級の寄生虫のような生き方は『ヴィクトリア女王』にも記述されているが、自分で働くことをしないで、力のあるものに頼って寄生する。そのことで生きながらえている寄生生物は、その寄生した相手が死滅することによって自分も死滅するのである。ナイチンゲールには伝統的な女性の生き方、即ち、男性に依存して生きている女性達もこの“寄生生活者”の範疇に入ったのである。ナイチンゲールにすれば、男性との結婚によって生活の基盤を持つ女性の生き方は、ある意味では寄生生物に似たような生き方に思えたのかもしれない。これは単に貴族階級の生き方に対する批判であるのみならず、男性に頼って生きている女性の生き方をも批判したと言えるであろう。ナイチンゲールの考えでは、勤労の精神こそが自己を守る唯一の手段であり、崇高なものであった。上流社会の多くは労働者の血と汗の結晶を吸い上げて華美な生活をしている。ところが労働者階級の、特に女性たちには生存のための過酷な現実があった。ナイチンゲールによれば、勤労の精神こそが自立の精神に繋がり、経済的安定に繋がるのであった。

ルソーが著『社会契約論』¹⁵⁵⁾で述べたがごとく、個人は自由をもちながら、その社会では目には見えない鎖で結ばれていると認識できるとしたら、それは人として社会で活動する全ての男女に与えられた課題であると認識できる。そうした認識をしたナイチンゲールが自己の目的にしたがって自己実現を目指したが、ナイチンゲールのこの考えはおいそれとは受けいれてもらえなかった。無力な弱者として男性に支配、あるいは保護される代わりに、自分の人生に決定権を持たない女性の生き方は、ナイチンゲールのような知的な女性にとって苦痛以外の何ものでもなく、美德とはほど遠い状況にあった。ナイチンゲールは「いったい

何の為に、他人の目、他人の勝手な期待、他人の意見などに悩まされる必要があるのでしょうか。自分のやりたいことをやらないで、他人から言われるままに生きた人で、優れたこと、有用なことを成し遂げた人は、いまだかつて誰もいないのです。」¹⁵⁶⁾と述べた。家族の執拗な反対にあったナイチンゲールは、1847年には神経衰弱になってしまい、とうとう自己の世界へ引きこもってしまった。この頃に書かれたのが『カサンドラ』である。

【女性は家庭内の白色奴隷】

ナイチンゲールは『カサンドラ』で痛烈に家庭生活を非難した。カサンドラはナイチンゲールが1849年にエジプト旅行をした際に、エジプトの歴史や宗教を研究した際に知り得た召使の女の名前である。『ギリシャ神話』によれば、カサンドラはトロイ国の王女である。『ギリシャ神話』にはトロイ戦争の際に敵に捕えられ、奴隷になったカサンドラ王女の一件が記述されている。美しいトロイ国の王女、カサンドラ姫に恋をしたアポロンは王女に数々の贈り物をした。その贈り物の中に未来を予見する能力があった。しかしながら、カサンドラ王女はアポロンの愛を拒否してしまったのである。怒ったアポロンはカサンドラ王女から贈り物を取り返そうとするが、神々の掟でそれはできない。そこでアポロンは、カサンドラ王女周囲の者の耳を塞いでしまい、カサンドラ王女の言うことが聞こえないようにしてしまったのである。有名なトロイ戦争では、場外に置き去りにされたギリシャ軍の置物について、カサンドラ王女はその置物の危険性を予見し、城内に入れてはならないと強く進言した。しかし、アポロンによってカサンドラ王女の言うことが聞こえなくなっている者達は、誰も聞き入れてくれない。そこで、トロイ軍は城壁の門を開け、置物を城内に引き入れてしまう。結果、トロイ軍は一夜のうちにギリシャ軍に負けてしまったのである。その後、カサンドラ王女は奴隷としてギリシャ軍に連れて行かれ、辛酸をなめるといふ物語である。

奴隷になったカサンドラ王女と自身を重ね合わせたナイチンゲールは、著作の序言に「およそ、人はだれでも寄る辺なく野に人生の辛酸をなめながら、一人さ迷う事が良くあります。そのような人はもっと住み良い世界を求めて避難したい衝動に駆られる事でしょう。しかし恐らく、もしこの世から、未熟なままで身を引いたりすると再び苦

しみとおさねばならないことになります。未熟なままで生まれる事は新しい生命を生き続ける力を十分にもちませんし、その新しい生命は再びやり直しをしなければならなくなるからです。』¹⁵⁷⁾と述べ、「女性は知性、倫理的行動、情熱という3つの徳を兼ね備えていながら、なぜ社会においてその3つのうちどの一つもいかせられるような場所を見つけられないのでしょうか?」¹⁵⁸⁾と述べた。今風に言うならば“早すぎた目覚め”である。女性というより、人として目覚めたナイチンゲールが、自己実現のできにくい状況に置かれていることに気づいたのである。ナイチンゲールの主張に誰も耳を傾けてくれないという状況は、神話の世界におけるカサンドラ王女と同じであった。『カサンドラ』でのナイチンゲールは宗教的な概念を強く強調しながらも、“伝統的な社会”の冷酷な現実の中で、伝統的な規制に女性が服従している無意味な生活を繰り返し述べ、女性が自己の生活も調整できないで、心霊的にも精神的にも貧弱な生き物になっていると指摘した。そして、女性たちは「家庭内の白色奴隷」¹⁵⁹⁾であると述べた。

特にナイチンゲールが最も言いたかった社会への告発、それは男女間における時間の使い方の相違についてであった。この後も何かにつけて“相違”はナイチンゲールの主要な課題であった。ナイチンゲールは「男性の時間は女性の時間よりも貴重なのですか?それとも男性と女性との相違は、女性が何もする事はないと自ら認めていることなのですか?」¹⁶⁰⁾と述べている。ナイチンゲールは更に女性の仕事に関して「女性には“子供に乳をやる”事を除いては、邪魔をしてはならないほどに重要な仕事があるはずはないとされています。』¹⁶¹⁾とも述べた。ナイチンゲールは女性達がこれを受け入れてきたと述べ、社会が女性の知性を浪費していると激しく告発したのである。男性にとっても女性にとっても、家庭は不滅の精神の発展する場としては狭すぎるのです。その小さな範囲では、不滅の精神を持った人が、創造主から授かった資質や才能によって運命づけられている仕事を行う機会は万に一つもないのです¹⁶²⁾。家庭は創造主から授かった能力を使う場ではなく、天職として神が授けたその能力を使う機会もないと家庭生活を非難しながら、ナイチンゲールは現時点において女性の知性は満足できないものであると告発し、幼児期にそうした強制不能な精神が形成されると言及した。

1850年12月30日付けの『Private Note』に、「おお、倦怠の日々よ、何時、はてるとも知れぬ夕暮れよ。いかに長い歲月、私はあの客間の時計を見つめては、あの針は決して十時にはならないという気がしていたことだろう。そして、この先、20年も、30年も同じ思いで過ごす事であろう。31歳になって、私に望ましいものはただ死あるのみ。』¹⁶³⁾とナイチンゲールは書いた。いつまでも進まない時計の針、永遠に続くであろう恐怖、いやそれ以上にもっと多くの時間を何もしないで過ごすかも知れない恐怖、絶え難い義務、そうした毎日死は死ぬ事より苦痛だったろう。この頃のナイチンゲールは、ギリシャ神話における悲劇的な王女カサンドラと同様であり、精神的危機状況は最大であったと思われる。ナイチンゲールは「自由よ、自由よ、おお、神がみしい自由よ、ついにやってきたのですね、この日の来るのをどんなに待った事か!おー!美しい死よ!」¹⁶⁴⁾と死に対して憧れのような期待感を持つようになった。

子どものころに見たイタリアの壁画のように、人間の背後にある神の御許に通ずる道、その道が今、開かれようとしていたのか、ナイチンゲールにとってそれは最も望んでいた瞬間であったのか、その高ぶった精神の落ち着きが彼女の来べき道を示したのか。死を待つほどの精神状態のなかでも、ナイチンゲールは自己をみつめ、感情を整理し、精神の統一を図っていった。そしてイギリスの女性たちに「目覚めなさい、母親達よ、眠っている母親達よ、目覚めなさい。』¹⁶⁵⁾と呼びかけながら、当時の無知蒙昧な女性たちを啓蒙しようとした。女性にとって家庭だけがその活動の場所ではないと訴え、女性も1人の人間として夢や希望をもって生きていく必要があると主張した。又、ナイチンゲールは『新約聖書』における“神の下での平等”思想から「イエス・キリストは女性を哀れまれて、単なる奴隷、単なる男性の情熱の僕としての地位から引き上げられて主の僕とされたのです。』¹⁶⁶⁾と述べ、キリストが女性を男性に従属するという位置づけから解放され、男性同様、創造主の僕になさったと述べている。ナイチンゲールの考えでは男女間には従属関係は存在しないのであった。女性が神の直接の僕であるならば、神が求める仕事を女性も行っているはずである。神が求める仕事とはいったい何?それは人のために役立つ仕事であり、社会に奉仕することであった。

【尊敬に値しない結婚生活】

結婚生活の内容や形態もそれぞれ歴史的背景があり、その流れの中で変化してきた。結婚は神が許した善である¹⁶⁷⁾であるがしかし、その善は夫婦の肉体的結合が子供を産み育てるという目的の手段として、あるいは、夫又は妻の欲情が罪を生み出すのを阻止する手段としての価値しか持たないがゆえに下位の善である。しかし、そこに霊的結合があれば、それは上位の善であるという考えはキリスト教的考え方である。男女が互いに愛し合うこと、つまり、それは精神的な結びつきによることが多い。しかしながら、それが家族制度の中では、結婚は家族を維持する一つの方法でもあった。また、他方、互いの物質的満足のためであるということもある。

1839年、オーウェンは『結婚・宗教・私有財産』で、「愛情などは決してなかったか、また、愛情が当分はあったかもしれないが失われてしまったような両親の子孫、富や地位のため行われた人為的な結婚、また、この国の僧侶によって最も非合理的につくりあげられ、富裕な人々以外は解消不可能な結婚の結果生まれたものであります。この不自然な方法によって生まれた子どもたちは、合法的と呼ばれるかも知れないが、両親間の愛情や純潔の欠乏のゆえに、心身ともに病みかつ不完全であります。」¹⁶⁸⁾と述べた。彼の、子ども達の性格形成論に関する限り、それは当時の社会がもたらす弊害であり、特に不自然な形の結婚が無知、貧困、悪徳、犯罪などの悲惨さの温床であると考えた。ナイチンゲールが看護師になって人々の役に立ちたいと考えて家族にその意志を打ち明けたのは1840年のことであった。家庭生活を非難しながらナイチンゲールは、結婚に対して、「男性と女性との意志疎通結婚、それはなんと軽々しくて、また尊敬に値しないことでしょう。結婚を真の女性の天職、女性の素晴らしい仕事だと呼べるでしょうか。」¹⁶⁹⁾と述べている。彼女はカサンドラがアポロンの求愛を拒んだがごとく、結婚生活には全く関心を持っていなかったのか。という前にそのみが女性の生きる道であると考えられていることに侮蔑の感情さえ持っている。

ナイチンゲールは婚約するということは自尊心を全て捨ててしまわなければならないことである¹⁷⁰⁾とも述べ、それは恋人たちの間で想いのままに話し合うことができないからであるとも述べている。彼女によれば、結婚するにはその前に

お互いを知るために十分な対話が必要であった。しかし、父親によって結婚相手が決まってしまう状況では、それは困難なことであった。そして当時、女の子が男性に対し話しかけるなんていうことは、礼儀に反する行為であった。だから、結婚にいたる道筋について当時は4つの方法しかなかった。ナイチンゲールによれば結婚にいたる道筋の第一は幼なじみであり、その例はいとこ同士が最も多いと述べている。いとこ同士の結婚は近親結婚であり、実際問題として狂気、種族の退化、身体欠陥、などが生み出される。これは自然界の種族保持のための法則に直接的に遺背することであるとの認識がナイチンゲールにはあった。実例を示しながら、ナイチンゲールはそれらが近親結婚の結果であるとして、慎まなければならない問題であると断言する。そうした例が実際、クエーカー教徒、スペイン大公、王室の人々、人里はなれた山間の人々などの間に存在していた。特にクエーカー教徒の特殊の神がかり的体験は、その人にとっての特別な神の啓示である。しかし、その実体験は、実社会にそぐわないものがあつたらしく、その宗教的世界観の中で心がさまよい、狂人を生み出しやすい状況にあつたのであろう。図らずもイギリスでは、同じくクエーカー教徒のウィリアム・テューク¹⁷¹⁾によって、1796年に初めて精神病者のための施設、ヨーク・リトリートが創設されている。彼の施設は田園の施設であり、戸外での鍛錬・規則的な散歩・農園での畑仕事という治療法であり、常に有効な効果をあげていた¹⁷²⁾。

第二に男性が女性を好きになったなら、女性がそれを受け入れること、そこには女性の意思はない。第三に誰かが勝手に誰かと知り合うことに意義があると考えた場合である。例としてナイチンゲールは、ルイ14世とスペイン王女の結婚を挙げている。これらは仮面の夫婦であり、彼らが決して夫婦ではなかったとも述べている。最後に挙げられたのは小説のような恋愛であった。最後はめったにないがと前置きしながら、ナイチンゲールは少女が自尊心を持っていなかったら、家族がいなくて、言いたいことがあるのに、それはできなくて、「偶然に束縛を離れて自由に話し合うことができたなら」¹⁷³⁾と述べている。ナイチンゲールは情熱という意味では男性同様、女性にもあるのに・・・、結婚は女性の人生にとって唯一の最大の出来事なのに、相手に聞きたいことがあっても聞けないで、恋愛に陥ることもめった

にしない¹⁷⁴⁾とも述べている。上流社会のたしなみという点では、女性から男性に何かを聞くということはできない現実があったものと考えられる。経験主義者であったナイチンゲール自身、実は聞きたい、あるいは確かめて見たい男性がいたのに聞けなかった経験をしたのでなかったろうか。ナイチンゲールによれば、結婚はまさに宝くじのようなものであった。

ヨーロッパにおける結婚は“種の保存”が目的であり、女性の役割は子供を産むこと、即ち、“種の保存”のための道具であった。『旧約聖書』によれば人間は神の創造物であった。19世紀中庸、ダーウィンに代表される科学主義の時代にあっても、種の保存は必然であった。シモーン・ド・ポーボワール¹⁷⁵⁾は著作『第二の性』で、女性の歴史を多彩な文献を引用して述べている。この著作の中で証明されている女性の状況は決して生易しいものではない。愛が結婚に先行し、その結果、子供が生まれるというのではなく、男女間の相互信頼がないままに結婚が成立した。ポーボワールが、「女性に与えられる蔑視と母親に与えられる尊敬」¹⁷⁶⁾と述べたように、同じ女性でありながらこの矛盾に満ちた評価も、多くの女性たちにとって我慢がならないことであったかも知れない。しかし、好むと好まざるに関わらず、この役割を従順に受け入れてきた女性たちが存在したと言うことであり、この現実を覆そうと考えた女性たちは少なかったと思われる。

ナイチンゲールのように精神的な結びつきを重要視する女性にとって、そうでない結婚は尊敬に値しなかったであろう。ナイチンゲールはまた、自分の見える範囲内で、つまり、上流社会の夫人達あるいは紳士達の中で、キリストが述べたような愛ある夫婦生活を目撃しなかったのかも知れない。最も、この家庭における重要な教育者となるべきモデルは両親である。ナイチンゲールが結婚を軽々しくて尊敬に値しないと考えた背景には、恐らく両親の生き方にも影響されたのではないだろうか。ウーダムスミスの『フロレンス・ナイチンゲール』¹⁷⁷⁾に明らかのように、ベンサム主義者として国会議員を目指した父親、その夢が破れたとはいえ、政治家たちとの交友関係は続いていたであろう。その父親を支えつつも精力的に上流夫人としての生き方と、娘たちに期待をかける母親の立場は、娘達が権力を持った男性と結婚することであったのかもしれない。しかしながら、父

親は学問好きの娘、ナイチンゲールに男性同様の教育をした。父親の影響を受けて知的に成長したナイチンゲールは、小社会である家庭内の生活に飽き足らなくなった。彼女は大きく羽ばたく運命にあった。ナイチンゲールにとって、家同士の決定で目的を同じくしない夫婦のあり方は、家庭生活のあり方そのものが矛盾に満ちていたのであろう。

ナイチンゲールの伝記にはその間に結婚を考えた男性もいたが、生涯の仕事のためにこれを断ったと書かれている。しかし、彼、リチャード・モンクトン・ミルズ¹⁷⁸⁾は、後のナイチンゲール基金設立の際に大きな支援をしている。自分の生活をトロイの王女“カサンドラ”にダブらせたナイチンゲールである。生涯の仕事のためにこれを断ったという事もあるが、恐らく、“カサンドラ”がアポロンの求愛を受け入れられなかったのと同様に、生来、男性を受け入れられない潔癖な性格であったのかも知れない。「結婚とは性的共同体である」¹⁷⁹⁾と述べたのはイマヌエル・カント¹⁸⁰⁾である。カントによれば、ある人間が他の人間の生殖器および性的能力についてなす相互的な使用をすることが結婚であるということになる。カントに代表されるように、結婚が肉体の相互使用であるという考え方は、精神性を重要視するナイチンゲールにとってそれははなはだ許しがたいことであったろう。両性が一緒になること、それは人格的なことであり、目的を同じくすることであった。

イギリスにおける女子教育思想研究である『イングランド女子教育史研究』には、アングロサクソンの女性達が処女を通すことは、女性とか男性とかによって定義されず、また父権制的結婚の枠の外にでることを意味しており、こうした禁欲主義を通すことによって、女性は自らの女性としての特質を超越し、男性的になることができた¹⁸¹⁾と述べている。しかし、ナイチンゲール自身、男性的であることは一部認めたとにしても、彼女にとって重要であったことは、決して男性的になりたいと望んではいなかったということである。ナイチンゲールが女性の伝統的な生き方を否定したということは、それ事態、重要な側面を持っているが、このナイチンゲールの言葉だけで彼女を結婚したくない女性として、あるいは結婚を軽蔑している女性、あるいは男性嫌いの女性と判断するのは早計であろう。

■ 伝統的な女性の美德を覆す

女性の美德とは何かと尋ねられた場合、特に一致した見解があるとは考えられない。『広辞苑』によれば美德とは賞賛されるに相応しい徳であるとする。しからば、徳とは何かと聞かれれば人倫の道ということになる。つまり、女性の美德とは、社会が容認しかつ女性特有の有すべき資質ということになる。そして、ヨーロッパにおける伝統的な女性の美德は、ウォルター・スコット¹⁸²⁾やジョージ・ゴードン・バイロン¹⁸³⁾に象徴されるような弱々しい女性像であった。彼らが示した女性らしさというものは有閑、無為の中の美しさによって、さらには彼女の被護者の男性に愛らしくかきずくことによって示されねばならなかった¹⁸⁴⁾。それは、女性の美しさ、優雅さ、繊細さ、などを具有し、男性が守ってやりたくするような存在である。

ジョン・デューイ¹⁸⁵⁾は『民主主義と教育』において“徳”という事に対する考え方を示した。それによれば「社会的に有効に参加させる能力を発達させる教育は道徳的である。」¹⁸⁶⁾と述べている。ナイチンゲールが求めて止まなかったものは、無為に生きている女性達に知性と道徳的な価値規範と情熱を持った女性として蘇らせる事であった。彼女の改革はその社会における女性の役割を拡張し、有用性を示したのである。

ナイチンゲールは後年、『アグネス・ジョーンズをしのんで』という著作を書いている。それはアグネスという女性を通しての美德論である。アグネスは救貧院の看護を実践し、病に倒れ死亡した看護師である。著作の中でナイチンゲールは、アグネスをユーナに例え、ユーナとライオンの物語をとて伝説には思えない¹⁸⁷⁾と述べながら、ここに血の通う肉体を持ったユーナが、ユーナと彼女の貧民が、ライオンよりもはるかに馴らすのがむずかしい貧民がいると述べた。そして、アグネスが品位と機転でもって最後まで仕事を遂行する能力を有していたと述べ、看護の仕事に就くものは彼女同様、最高の厳しい務めに耐え忍ばなければならないと述べた。そこには厳しい務めに従事する奉仕と犠牲的精神、忍耐という美德がある。しかし、それらの美德は単に女性のみということではなく、男性にも必要な徳であり、特に労働者には最も求められる徳である。

ナイチンゲールが述べた伝説のユーナとライオ

ンの物語は恐らく、エドモンド・スペンサー¹⁸⁸⁾の著作『妖精の女王』¹⁸⁹⁾に登場するユーナ姫のことであろう。「天が下広しといえども、嫉妬の罫とか、運命の意地悪い気紛れのため、美がいわれのない惨めな境遇に落とされることほど人の同情をそそるものはない。」¹⁹⁰⁾という書き出しに始まる同著は、美に対する賛歌である。物語では、天使のような顔をしたユーナ姫が森でライオンと遭遇する場面から始まる。血に飢えたライオンはユーナ姫を認めると、姫を一気に食べてしまおうとした。ユーナ姫の傍に近づいた時、ライオンの血に飢えて猛り立っていた心は哀れみの情でやわらぎ、輝く姫の姿に驚いて、猛々しい力はうせた。ライオンは彼女を襲うことはできず、逆に彼女の足元にひれ伏したという物語である。その後、ライオンは姫を一人で放って置かず、護衛としてついて行き、姫が眠っているときはいつも起きて見張り、起きている時には、言いつけに従い、その美しい目から命令を読み取り、顔つきから常にその気持ちを汲み取ったと書かれている。作者の「ああ、美は最も強いものを支配し、真実は仇なす無法を屈服させることができることは、不思議なことだ。」という叙述に女性の伝統的な美しさに対する賛辞がある。百獣の王であるライオンでさえひれ伏したユーナ姫の物語を例示しながら、アグネスの気高さを印象付けたかったのであろう。それは、ナイチンゲール自身が有する理想的な女性像を反映していると考えられる。社会で男性同様に働く女性たちは“男まさり”あるいは“男性的”とする評価は伝統的であり、その女性の美德は、男性的であるがしかし、ルソーが『エミール』¹⁹¹⁾で述べた女性の美德、あるいは伝統的な女性の美德とも一致する。

ナイチンゲールは、知性、倫理的行動、情熱という3つの徳を兼ね備えた女性がなぜ社会においてその徳が活かされるような場所が見つけられないのかと述べた。彼女は自身の能力を十分に承知しており、自身の知性が活用できる場所を捜し求めていた。そして、理想的な生活は「よいものを何処までも追求し、大きな目的に一心不乱に従事し、優れた理想と高邁な感情に対して共感できる気品ある計画の中で生きられるものです。」¹⁹²⁾と述べた。それは女性が社会的に倫理的な行動を可能とさせる知性と情熱を有していることを証明することでもあった。

1876年の見習い生への書簡で、世界でも最高と

言われる政治家の“計り知れないほどの大きな悲劇も、小さな事に付いての女性の不徳からくる無思慮が原因である”と述べ、無思慮は不徳であると述べ、看護師の訓練もこうした女性の無思慮を無くすためであると述べた。ナイチンゲールは家族との対立で多くの犠牲を払った。が、自己の人生における精神的危機状況から蘇ったとき、彼女はストレイチーいわく“鷹のような女性”¹⁹³⁾に変貌していた。自我の確立、それは青年期までの課題である。その課題を達成した時、人は自己を自尊し、他人の心との融和を計ろうとする。彼女の主張は女性のライフサイクルのあり方を示したものである。自己の生涯を自分で判断して決定していく能力、その選択の中で個人が結婚する、あるいはそうではない生き方を選択することは各個人の問題であり、権利でもある。

社会学者トレヴェリアンは、ナイチンゲールが女性に教育を施して良質の看護師を生み出した事から、他の分野でも女性にシステム的な教育を施こそうという試みが成されるようになり、実質的に女性は社会に解放されたと評価し、併せて従来、弱々しく男性に保護されなければ生きていけないような女性が理想的女性像であったのが、ナイチンゲール以降、女性であっても社会で役に立つ女性が理想的であると考えられるようになったと述べている。

■ おわりに

人の価値や信念は多くがその育った家庭環境や信仰、教育を受けた人の考え方、また、その友人などによって形成されていく。本論では、ナイチンゲール家とイギリス社会を概観し、ナイチンゲール教育思想の源流を探究した。

ナイチンゲールは生地イタリアを皮切りに成長・発達過程において家族的因子の他、エジプトやギリシャの歴史、あるいはヨーロッパ諸国の思想家や教育者達の影響をうけた。敏感で繊細なナイチンゲールの気質は家庭および社会環境に刺激され、その刺激は自身がなすべきことは何かという問いを生み出し、その問いは自身がなすべき行動を指し示した。個人の発達という意味で、社会環境は決して安定していた時期であったとは言えないが、個人の資質および家族的素因からして恵まれた状況にあったと言えよう。特に父親の有した学究的な態度と、父親の交友関係による幅広い

政治的・経済的思想や活動による影響は多大であった。そうした事は当時の宗教に対する現実認識という形でも現れた。

こまやかな神経と鋭い洞察力を持ったナイチンゲールは、当時のイギリス社会の現状を鋭く見抜き、批判した。不潔な社会環境、貧困で無知な労働者階級の人々と家庭内における女性の位置づけなどについて言えば、宗教的信条で培われた自分の高い価値規範と正義感はあるべき姿が明確であった。その状況を改善したいと考えたとき、上流社会の伝統的な規範は厚い壁であった。その早すぎる目覚めは、いくつもの闘いを生じさせた。家庭生活の無為さを非難し、上流社会の女性達の伝統的な生き方を非難し、それを受けいれている女性たちを非難し、女性であっても高い理想を持って生きるべきであると主張した。彼女の姿勢は今日起きている現象をそのまま受けいれるのではなく、科学的な根拠を持って物ごとを観察し、認識し、変化させていこうとする姿勢である。

ナイチンゲールが望んで止まなかった理想的な生活は良いものをどこまでも追及し、大きな目的に一心不乱に従事し、優れた理想と高邁な感情に対して共感する気品ある計画を持った生活であった。それは伝統的な規制の中で、与えられた役割をそのまま柔順に受けいれ、男性の力に頼って生きていくのではなく、自分の一生は自分で責任を持つという事であった。そこに彼女の言う人格の問題があった。彼女の主張は“最大多数の最大幸福”で有名なベンサム的主張と類似している。彼の主張は人間の基本的人権である幸福追求権の原点があった。女性が自己の生涯を考えた上で、自分でその生き方に対して責任を持ち、自分で自己の一生に対して計画を立て、その中で生じる生活事象上の問題を、自己の力で解決していくことができるようになった時始めて、女性は自立できたのであり、人格を持つことができるのであった。

哲学 (philosophy) が人生の根本的諸問題追究する学問であり、観念論であるとしたら、ナイチンゲールは、日常生活の中で引き起こされる現象を分析し、現実的対応に転換可能にさせる卓越した知識・技能を有している。その意味ではイギリス経験認識論を引き継ぎ、認識から行為にいたるプロセスを経るプラグマティズムであったと考えられる。哲学 (philosophy) の語源がギリシャ語の *philosophia* (愛と知恵) によるとしたら、ナイチンゲールは現実社会の観察で得られた情報とそ

の分析に問題を明確にし、その社会悪に敢然と挑戦し、対処としての改善・改革を積極的に推進する女性であり、哲学者であり、科学者でもあった。つまり、現象学的認識論という意味で、実際に存在

する問題を認識するのみにとどまらず、行為において有徳であったことがナイチンゲールをして偉大な世界の理想的人物像と評価された所以であろう。

注

- 1) この言葉は一般にミルの言葉として知られているが、彼が『女性の解放』を著したのは1869年であり、その著作の中にこの言葉は見られない。ナイチンゲールは1851年の『カイゼルスウェルト学園によせて』という著作の冒頭にこの言葉が古い言い伝えであると書いている。
- 2) George Macaulay Trevelyan (1944); English Social History, (松浦高嶺他訳；イギリス社会史2, p451, 美鈴書房, 1988年.)
- 3) 佐々木秀美著；歴史に見るわが国の看護教育—その光と影, 青山社, 2005年.
- 4) フローレンス；イタリアのルネッサンス都市フィレンツ (Firenze).
- 5) ベンサム主義者；功利主義 (Utilitarian) の中心人物であるベンサムの思想はイギリス啓蒙期の哲学に用意されたものの発展であった。増大する科学的知識による社会の進歩向上に絶大なる信頼を寄せ、その現実的達成を期し、社会改革のため大いに世論を喚起した。選挙法及び貧民法の改正。穀物条例の廃止、植民地の奴隷解放、参政権の拡大、その他産業革命の結果による労働者の生活条件の改善に功利主義派の人たちの活動に依拠している。
- 6) Martha Vicinus & Bea Nergaard Edited; Ever Yours, Florence Nightingale Selected Letters, p440, VIRACO PRESS, 1989.
- 7) Gillian Gill; Nightingales Florence and Her Family, Mackays of Chatham, 2005.
- 8) Sir Edward T. Cook; The Life of Florence Nightingale, (中村妙子他訳；ナイチンゲール [その生涯と思想 I・II・III], 時空出版, 1993年.)
- 9) Cecil Woodham-Smith (1950); Florence Nightingale, (武山満智子他訳；フロレンス—ナイチンゲールの生涯 [上・下巻], 現代社, 1987年.)
- 10) ルーシー・セーマー著, 湯楨ます訳；フロレンス・ナイチンゲール, メジカルフレンド社, 1885年.
- 11) バーバラ・ハーメリンク著, 西田明訳；ナイチンゲール伝, 近代看護の創始者, メジカルフレンド社, 1987年.
- 12) Litton Strachey; Eminent Victorians, Penguin Books, 1986.
- 13) 前掲書6)
- 14) Gillian Gill; Nightingales, Random House, 2005.
- 15) Gillian Gill; Nightingales Florence and Her Family, Mackays of Chatham, 2005.
- 16) Lynn McDonald; Florence Nightingale on Women, Medicine, Midwifery and Prostitution, Wilfrid Laurier University Press, 2005.
- 17) ピーター・ナイチンゲール (Peter Nightingale 1705-1763)；ダービーシャー州の地方貴族であったが、狩猟好きで夜中に障害物競馬をやっつけのけるような命知らずの馬乗りで、賭け事師で大酒のみで卑しい連中とも平気で付き合う人間であり気違いピーター・ナイチンゲールとして名前をはせていた。『フロレンス・ナイチンゲールの生涯』より。
- 18) ウィリアム・ショア (William Shore 1755-822)；ナイチンゲールの祖父。イギリスのシェフィールド (工業都市) の近くタプトン出身。ピーター・ナイチンゲールの娘アンと結婚した。
- 19) メアリー・ショア (Mary Shore 1798-1889)；ナイチンゲールの父の妹で通称メイ叔母。後にナイチンゲールの母親の弟サミュエル・スミス (サム叔父) の妻となる。
- 20) ナイチンゲール氏 (William Edward Nightingale 1794-1874)；ナイチンゲールの父親。ケンブリッジ大学を卒業。国会議員を目指したが、落選。地方貴族としての役割を果たしながら、子供達の教育に専念した。

- 21) サムエル・スミス (Samuel Smith 1794-1880) ; ウィリアム・スミスの息子であり、ナイチンゲールの母親の弟。
- 22) ブランチ・クラフ (Blanche Clough 1828-1904) ; ナイチンゲールの従姉妹。父親の妹 (メアリー・スミス) の娘。1854年にアーサー・ヒュー・クラフと結婚し、3人の子どもをもうけた。その長女にフローレンスと名づけた。
- 23) フランセス・スミス (Frances Smith 1788-1880) ; ナイチンゲールの母親、フランセスの父親はウィリアム・スミスという国会議員。
- 24) 前掲書9)
- 25) ウィリアム・スミス (William Smith 1756-1835) ; ナイチンゲールの母方の祖父で富豪な商人、国会議員。奴隷解放論者。
- 26) ハノーバー王朝 ; ジョージ1世の即位からヴィクトリア女王即位 (1714-1901) までの年間をいう。
- 27) フローラ・マクドナルド (Flora Macdonald 1722-1790) ; スコットランドの女傑。1746年から3年間幽閉された。
- 28) ファニー・アレン (Fanny Allen 1781-1875) ; 女性の権利運動の前衛。ナイチンゲールの母親のフランセスは子どもの頃からアレン家と親しく、ナイチンゲールの両親はイタリア愛国者内輪の会のメンバーであった。
- 29) チャールズ・ダーウィン (Charles Darwin 1809-1882) ; エジンバラ大学で医学を学ぶがこれを嫌い、ケンブリッジ大学で神学を学ぶ。この時期に昆虫学と植物学に触れ、パタゴニア探検 (1831-1836) の職を確保し、5年に渡る探検中に諸国の動植物や地質の詳細を得て、出版した。妻はアレン家の娘エマ。
- 30) ジーン・チャールズ・レオナルド・シモンデ・デ・シスモンディ (Jean Charles Leonard Simonnde de Sismondi 1773-1842) ; スイスの経済学者。歴史家、フランス革命の後英国に逃れ、ついでイタリアに居住し後にスイスに戻りジュネーブ大学の古代史、文学史、経済学講師となる。母親のフランセスとアレン家とは古い付き合いであり、その娘ファニー・アレンは女性の権利運動の前衛、姪のエマはダーウィンと結婚、ジェシーはこのシスモンディと結婚していた。
- 31) チャールズ・ダーウィン著、八杉龍一訳 ; 種の起源上下、岩波書店、1992年。
- 32) ジャン・ジャック・ルソー (Jean Jacques Rousseau 1712-1778) ; フランス啓蒙期の天才思想家。彼の活動はきわめて多面的で、その主権在民、自由平等、愛国などの思想がアメリカ独立やフランス革命に理論的基礎を与えたのみでなく、社会主義、人格主義、永久平和の理想、ヒューマンズム教育、ロマン主義など、近代を形成する先駆者である。人間の自然の善性を原理に教育は宝の詰め込み出なく、ただ被教育者の自然的能力の開花を妨げるべきものの除去を目標とする「消極教育」の主張した。知的早期教育の否定、徳育と体育の重視、実物教育、教育の手段化に反対してまず人間たれと説くこと、など教育学上画期的な見解を示し、カントにも大きな影響を与えた。
- 33) 滝内大三著 ; イングランド女子教育研究、pp118-119、法律文化社、1994年。
- 34) 前掲書9)、pp30-33。
- 35) パースィノーブ (Parthnope Nightingale 1819-1890) ; ナイチンゲールの姉。ギリシャのパースィノーブで生まれたのでこの名前が付けられた。ナイチンゲール伝によってはパルセノーブ、パーセナピ、パースィノーブと様々であるが、ここでは武山満知子訳のパースィノーブを使う。
- 36) リットン・ストレイチャー (Lytton Strachey 1880-1932) ; 英国の伝記小説家。ケンブリッジ大学に学び、ロンドンで作家、芸術家の一員となり、批評家として出発し、『Eminent Victorians』は伝記のジャンルにおいて典型的であった自身満々の大冊主義に対する型破りな挑戦状となった。
- 37) 前掲書12)、p112。
- 38) パティ (Martha Frances 1782-1870) ; 母親の姉でマーシャ・フランセスのこと。通称パティ叔母さんと呼ばれている。
- 39) メアリー・クラーク (Mary Clarke Mohl 1793-1883) ; 子ども時代から成人するまで各地を転々とするが、レカミエ夫人の支援により、パリに“クラークキー”という最も優秀で知的なサロンを持った。

- 特にヘンリー・ボナハム・カーターや文学者たちと親密な交友関係を持った。
- 40) ユリウス・モール (Julius Mohl 1800-1876) ; ドイツ南西部地方のヴェルテンブルク出身の貴族。忠実な新教の信者であり、東洋学者でもあった。メアリーに恋をしてフランスに帰化した。『フローレンス・ナイチンゲールの生涯』 p40より
 - 41) ビクトール・ユーゴー (Victor Marie Hugo 1802-1855) ; フランスの詩人、小説家。
 - 42) アルフレド・ヴィクター・ヴィニ (Alfred Victor de Vigny 1797-1877) ; フランスの詩人、小説家。
 - 43) ルイス・アドルフ・ティエール (Louis Adolphe Thiers 1797-1877) ; フランスの政治家。第3共和制初代の大統領。
 - 44) フランソワ・ピエール・ギョーム・ギゾー (François Pierre Guillaume Guizot 1787-1874) ; フランスの政治家。
 - 45) ヴィクトリア女王 (Victoria Queen 1819-1901) ; 女王としての在位は1837-1901までである。ジョージ3世の4男ケント公エドワードと後にベルギーの国王となったレオポルドの従弟。ザクセン-コーブルク家のヴィクトリア・マリア・ルイザの娘。1838年、ウインストミンスター寺院で戴冠した。つねに彼女に書簡で助言を与えた叔父レオポルドの細心の教育のおかげで、立憲君書の原則を正確に把握し、強い意思の持ち主を示した。
 - 46) チャールズ2世 (Charles II 1630-1685) ; イギリスおよびアイルランドの国王 (1660-1685)。チャールズ1世の息子、清教徒革命で皇太子として、父親の側にたち追放される。父の処刑によって国王を名乗り、スコットランドで即位 (1651)、軍を率いてイングランドに攻め入り惨敗。9年間の追放の後にイングランド国民によって飛び戻され、1660年に復権した。
 - 47) アンソニー・アシュレイ・クーパー・シャフツベリー伯爵 (Anthony Ashley Cooper Shaftesbury, 1st Earl 1621-1683) ; 政治家。ケンブリッジ大学に学び、短期議会 (1640)、指名議会 (1653) に選出され、クロムウエルの国策会議の一員になるが、1655年に野に下る。王政復古で男爵に叙され、大蔵大臣、政治顧問団の一員、伯爵、大法官となる。1673年に罷免された。ヨーク公ジェイムズの王位継承反対派を率い、反逆罪で告発され、1682年にオランダに亡命した。ロックはこのシャフツベリー伯爵の主治医であった。
 - 48) ウィリアム・ランブ・メルボン卿 (Lord William Lamb Melbourne 1779-1848) ; イギリスの政治家。1835-41年まで首相を務めた。
 - 49) ヘンリー・ジョン・テンプル・パーマストン卿 (Henry John Temple Palmerston 1784-1865) ; 英国の政治家。彼は英国外交政策を30年間にわたって支配し、1855-1858年、1859-1865年の間自由党内閣の首相。
 - 50) ロバート・ピール (Sir Robert Peel 1788-1850) ; イギリスの政治家。グレー内閣の選挙法改正に反対して首相となったが、閣僚の反対にあって辞職し、再任してその撤廃を実現し、イギリスの自由貿易の基礎を作った。
 - 51) シドニー・ハーバート (Sidney Herbert 1810-1861) ; クリミア戦争当時の戦争大臣。ナイチンゲールの生涯のパートナーであり、良き理解者、協力者である。名門ペンブルック伯爵家に生まれ、政治家となった人物。1852-1855、1859-1860に陸軍大臣を務め、ナイチンゲールの改革を推進した。しかし、激務のため病気となり、公務からの引退を希望するが、ナイチンゲールはそれを許さなかったといわれている。辞職後に病死。
 - 52) ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer 1820-1903) ; イギリスの進化論哲学者。社会ダーウィニズムの指導的提唱者。
 - 53) 清水幾太郎編 ; 世界の名著46 スペンサー、『科学の起源』, pp337-396, 中央公論社, 1995年。
 - 54) 清水幾太郎編 ; 前掲書53), スペンサー, 『進歩について—その法則と原因』, pp399-442。
 - 55) 清水幾太郎編 ; 前掲書53), スペンサー, 『知識の価値—教育論第一部』, pp445-486。
 - 56) 前掲書54), p457。
 - 57) 塚田理著 ; イングランドの宗教—アングリカニズムの歴史とその性質, 教文館, 2004年。
 - 58) 前掲書57), pp29-31。

- 59) ヘンリー 8 世 (Henry VIII 1491-1547) : 即位後すぐに兄アーサーの未亡人と結婚するが離婚を決意し、内密でアン・ブーリンと結婚した。1534年に前妻との結婚を無効にし、王はイギリス国教会の唯一の首長であるとして修道院弾圧政策を始めた。
- 60) 前掲書33), p225.
- 61) マルティン・ルーテル (Martin Luther 1483-1546) : ドイツ生まれ、ドイツ宗教改革の頂点に位置する人物。1501年にエルフルト大学に入学、1502年に学士号、1505年に修士号を取得した。1510年にローマに派遣され、その地の腐敗に衝撃を受ける。教皇庁の発行する免罪符やドミニコ会修士ヨハン・テツルの破廉恥な行為に怒りが、行為ではなく信仰による救済の教義を説いた。
- 62) ジョン・スミス (John Smith 1555-1612) : 元国教会牧師であったが、リストを唯一のかしらと定めたパウロの言葉に反しているとした分離派に移った。宗教弾圧を逃れてオランダに逃れて、アムステルダムでバプテリスト教会を設立した。
- 63) ジョージ・フォックス (George Fox 1624-1691) : 神の啓示を受けて流浪の旅に出て、神の言葉が自分に届くときの震える (quake) 体験を重視し、神の外的啓示である聖書よりも、神からの直接的な内的啓示によって光輝けと説いた。
- 64) 前掲書33), p227.
- 65) エリザベス女王 (1533-1603) : ヘンリーの第二の妻アン・プリンの娘。誰よりも父親似であったエリザベスは優れた政治的判断力と決断力を持ち合わせた。
- 66) 前掲書57), p58.
- 67) 前掲書57), p59.
- 68) 前掲書57), p63.
- 69) フランシス・ベーコン (Francis Bacon 1561-1625) : ケンブリッジ大学で法学を学んだ後、ジェームズ一世の時、Lord Chancellor となったが、汚職のかどによって追放され、一時、ロンドン塔に幽閉された。その後は、研究と著作に没頭した生涯を送った。彼の思想は、全ての真理性の探究を人間の経験論的認識に求め、経験的実証によって実在を明らかにしようとするものであり、従来の演繹的方法を退け、経験と実験によって真理性を問う帰納法を提唱した。
- 70) 前掲書57), p177-178.
- 71) ジョン・ロック (John Lock 1632-1704) : イギリス経験論の代表的哲学者。近代民主主義の代表的思想家の一人。オックスフォードにて医学と哲学を学ぶ。ピューリタン革命、王政復古、名誉革命と激動していく時代に生活し、人民主権に基づく代議的民主政治の理論を基礎づけることによって、名誉革命の指導的理論家になった。医師でもあり、ホイッグ党初代党首、シャフツベリー伯爵と親交を結び、政治的にもその生涯を共にした。著作『教育に関する考察』は有名。
- 72) 前掲書57), p244.
- 73) ユニテリアン (Unitarian) : 正統的キリスト教の教義である三位一体論に反対し、父なる神だけを認め、子なるイエス・キリストの神性を否定しキリストの人間性を強調する教派および主張。神学的には、4世紀に異端とされたアリウス派もその一つといわれている。
- 74) 前掲書57), p245.
- 75) Stanley Weintraub; Victoria, (平岡緑訳: ヴィクトリア女王 (上・下巻), 中央公論社, 1993年.)
- 76) エンゲルス著, 全集刊行委員会訳; イギリスにおける労働者階級の状態, 大月書店, 1992年.
- 77) ラグビー校: イングランド中部ウォリックシャーにあるパブリック・スクールである。パブリック・スクールは、私立の中等教育機関で、主としてイングランド上流階級の男子のための学校であった。
- 78) ロバート・オーウェン (Robert Owen 1771-1858) : イギリスの近代社会主義の創始者。学歴は小学校程度であるが、彼の経営するスコットランド、ニュー・ラナーク紡績工場における「性格形成学院」の実践は、直観教授などの進歩的方式を採用し、世界最初の幼稚園と言われた。
- 79) Robert Owen (1857); The Life of Robert Owen, (五島茂訳; オウエン自叙伝, p377, 1995年)
- 80) ジェレミー・ベンサム (Jeremy Bentham 1748-1832) : イギリスの哲学者、法学者、社会改革家である。最も有名な功利主義者である。彼はあらゆる行為と立法の適切な目的は“最大多数の最大幸

- 福である”と説いた。1792年にフランス共和国名誉市民になり多数の著書を発刊して経済・政治を説いた。
- 81) J・R. デインウィディ著、永井義雄訳；ベンサム, p181, 日本経済新聞社, 1993年.
 - 82) ジェームズ・ジョセフ・シルベスター (James Joseph Sylvester 1814-1897)；数学者。ロンドン生まれでオックスフォード大学に学ぶ。ユダヤ人であったために卒業資格を与えられなかった。弁護士や保険計理士を経て1883年からオックスフォード大学の数学の教授となった。
 - 83) アドルフ・ケトレ (Lambert Jacque Adolf Quetelet 1796-1874)；ベルギーの天文学者、気象学者、統計学者。ケトレは気象学の研究から植物の開花の法則を導き出した。
 - 84) ウィリアム・フォー博士 (William Farr 1803-1883)；統計学の先駆者。1851年と1861年には国勢調査委員会の補助の仕事を行い、1871年の国勢調査委員長となった。死亡率の統計開発をナイチンゲールと一緒にやった。
 - 85) 田尾清子著；統計学者としてのナイチンゲール, p18, 医学書院, 1991年.
 - 86) 前掲書84), pp32-33.
 - 87) Florence Nightingale (1888) ;To the nurses and probationers trained under the “Nightingale Fund”, (湯植ます他訳；ナイチンゲール著作集第三巻, 看護師と見習い生への書簡, p176, 現代社, 1985年.)
 - 88) オーギュスト・コント (Auguste Comte 1798-1857)；フランスの哲学者、社会学者、実証主義の始祖。サン・シモンの弟子。彼は、全ての科学は神学的段階から形而上学的段階を経て、実証的あるいは経験的段階にいたったものとみなし、実証的宗教においては、崇敬の対象は人間性であり、その目的は人類の幸福と進歩にあるとした。
 - 89) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale ; Cassandra/Suggestions for Thought, Pickering & Chatto Limited, 1991.
 - 90) 清水幾太郎編；世界の名著46 コント, 『社会静学と社会動学』, p256, 中央公論社, 1995年.
 - 91) 前掲書6), p30.
 - 92) オックスフォード大学：イギリス最古の大学。オックスフォード市にある。起源は12世紀にさかのぼり、独自の歴史と伝統を誇る多数の寄宿制の学寮からなる。ケンブリッジ大学とともにイギリス指導階層の最高教育機関である。
 - 93) ベンジャミン・ジョウエット (Benjamin Jowett 1817-1893)；イギリスのギリシャ哲学者。ナイチンゲールの思想に共鳴し、彼女の仕事を手伝い、多くの助言を与えた。ナイチンゲールの生涯の友人である。
 - 94) プラトン (Platon 427-347. B・C)；アテナイの貴族の息子として生まれた。プラトンは三つの対話集『弁明』『クリトン』『バイドロス』を著して、師ソクラテスの裁判と最後の日々を忘れられないものにした。この対話集にはソクラテスに対するプラトンの深い敬虔が鮮明に現れているとされる。
 - 95) 神秘主義 (mysticism)；神・絶対者・存在そのものなど究極の實在になんらかの仕方で帰一融合できるという哲学。宗教上の立場。東洋ではインドのヨガ、西洋ではプロティノスに始まり新プラトン学派などがある。現在ではハイデガーが有名。
 - 96) イデア論 (idea)；プラトン哲学の中心概念で理性によってのみ認識される實在。価値判断の基準となる。近世以降、観念、または理念の意となる。
 - 97) 前掲書9)
 - 98) 前掲書12), p157.
 - 99) トマス・アーノルド (Thomas Arnold 1795-1842)；イギリスの教育学者。オックスフォード大学に学び、1828年にラグビー校の校長に就任した。青少年の教育に携わりながら、彼らに広い視野に立つ思想的可能性を開花させた。彼の思想的影響を受けた青年神学者たちが、コールリッジの哲学や思想を吸収し、新たな神学的枠組みを形成したといわれる。『イングランドの宗教』p216より。
 - 100) サミュエル・コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge 1772-1834)；英国の詩人・思想家。ケンブリッジ大学で学び、ドイツ哲学に関心を持った。彼は当時のプロテスタントイズムに反対し、物

質主義的合理主義を批判し、宇宙空間的広がりを持つ精神的創造的世界の文脈の中で、宗教的真理を把握しようとした。『イングランドの宗教』 p216より

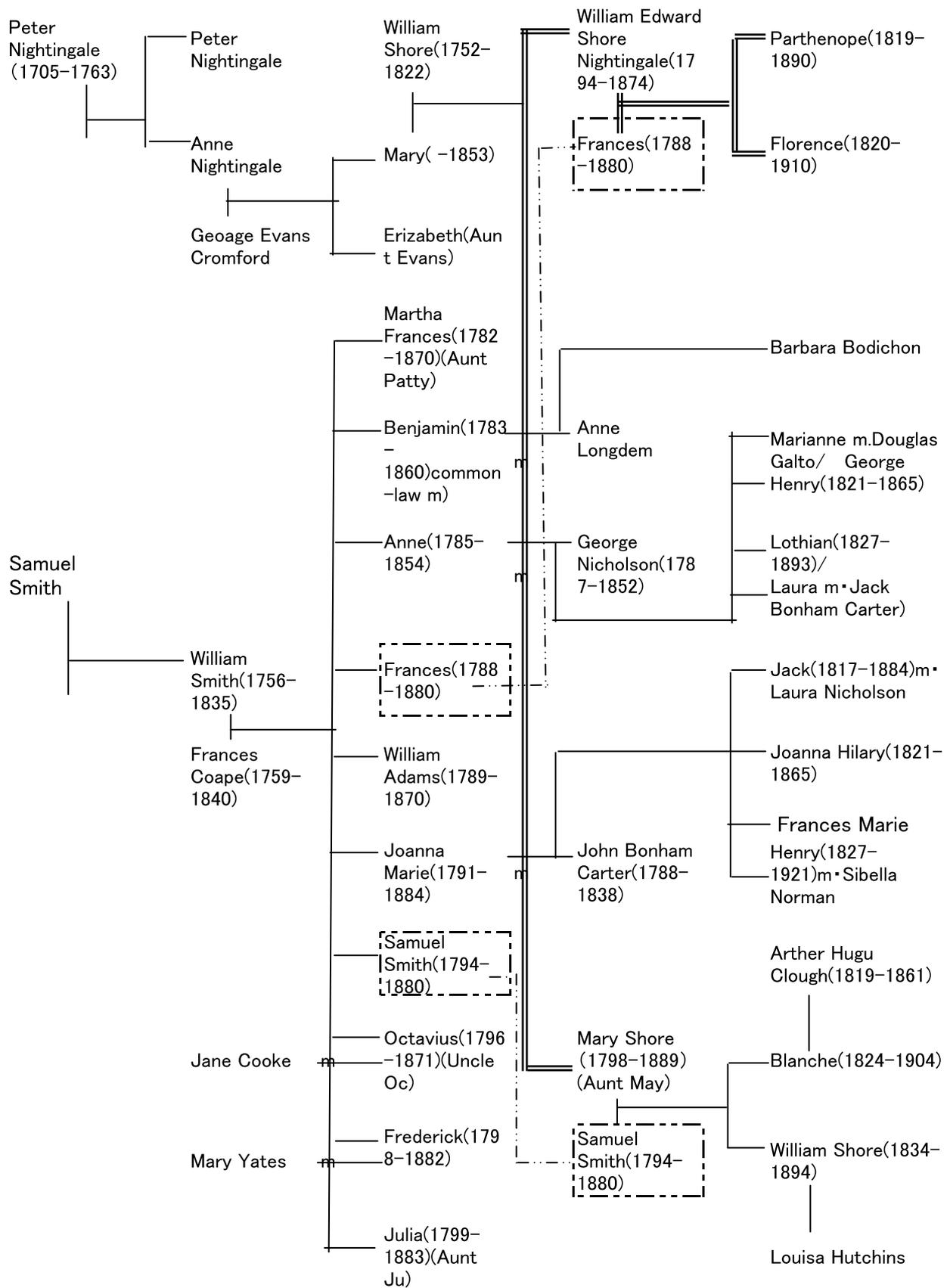
- 101) 前掲書57), p217.
- 102) 前掲書86), p385.
- 103) 柴田京子, 津田右子, 佐々木秀美著; ナイチンゲールの宗教観に関する若干の考察—友人アーサー・ヒュー・クラフとの関わりをてがかりに— (その1), 総合看護 Vol. 40, No. 3, pp41-48, 2007年.
ナイチンゲールの宗教観に関する若干の考察—友人アーサー・ヒュー・クラフとの関わりをてがかりに— (その2), 総合 Vol. 40, No. 4, pp73-80, 2007年.
- 104) アーサー・ヒュー・クラフ (Arther Hugh Clough 1819-1861); 英国の詩人. ラグビー校で学んだ後, オックスフォード大学で学んだ. ナイチンゲールの友人であり, 彼女の従妹ブランチと結婚, ナイチンゲールの仕事を手伝った.
- 105) Florence Nightingale (1860); Note on Nursing, Scutari Press, 1992.
- 106) Florence Nightingale (1858); Subsidiary Notes as to the Introduction of Female Nursing into Military Hospitals. (湯槇ます他訳: ナイチンゲール著作集第一巻, 女性による陸軍病院の看護, 現代社, 1985年.)
- 107) Florence Nightingale (1851); The Institution of Kaiserswerth on the Rhine for the Practical Training of Deaconesses, under the Direction of the Rev, (湯槇ます他訳: ナイチンゲール著作集第一巻, カイゼルスウェルト学園によせて, 現代社, 1983年.)
- 108) 前掲書8), p328.
- 109) 前掲書8), p73.
- 110) イマヌエル・スエデンボルグ (Emanuel Swedenborg 1688-1772); スエーデン生まれ. 神秘主義者, 自然科学者, 自己の神秘的体験から霊的な世界と直接交信できることを確信. 『天界の秘儀』において自身の霊的体験の記述をした. 1787年に彼の信奉者たちによって新エルサレム教会派ができた.
- 111) イマヌエル・スエデンボルグ著, 柳瀬芳意訳; 天界と地獄, 静思社, 1998年.
- 112) イマヌエル・スエデンボルグ著, 柳瀬芳意訳; 結婚愛, 静思社, 1991年.
- 113) Florence Nightingale (1860); Suggestions for Thought to searchers after religious truth, (湯槇ます他訳; ナイチンゲール著作集第三巻, 思索への示唆, p188, 現代社, 1985年.)
- 114) 前掲書8), p75
- 115) ヘンリー・エドワード・マニング (Henry Edward Manning 1808-1892); ローマ・カトリックの聖職者. オックスフォード大学に学び, イギリス国教会の聖職者となる. 1851年にカトリックに転向, 1865年にはウェストミンスターの大司教に任命された. 1875年に枢機卿になり, 教皇至上論の代表者であり続けた.
- 116) バーモンゼイ修道院長 (Mother Superior of the Bermondsey. Mrs, Georgiana); バーモンゼイはローマン・カソリック女子修道院の尼僧長. マニング大司教の協力により, ナイチンゲールのクリミア行きに同行し, 協力した. ナイチンゲールのクリミアにおける多くの成功は彼女に負うところが多いと評されている.
- 117) 前掲書88)
- 118) 前掲書12)
- 119) ジョハン・ヘンリック・ペスタロッチー (Johann Heinrich Pestalozzi 1746-1827); 哲学者としてまた, 教育思想家でもあり, 貧民教育の実践者としても有名である.
- 120) 五島茂他編; 世界の名著42 オウエン 『現下窮乏原因の一解明』, p201, 中央公論社, 1996年.
- 121) サン・シモン (Claude Henri de Rouvroy Saint-Simon 1760-1825); フランス社会主義の創始者. アメリカ独立運動に参加し, フランス革命時には貴族であったために投獄される. 浪費のために生活に窮し文筆活動を行う. 彼の著作はフランス革命時の残虐行為に反発した. 人間の同胞愛科学技術が新しい精神的な拠り所になるだろうと主張した. 『新キリスト教論』『産業体制論』などがある.
- 122) シャルル・フーリエ (Charles Fourier 1772-1837年); フランスの空想的社会主義者. 彼の特徴は

- 歴史観にあるとされる。エデン（楽園）、蒙昧、家長性、野蛮、文明という過程の悪循環の中で、貧困が生じるとして、工場における賃金労働者の奴隷化、失業、女性の隷属を基本原理とする家族制度を攻撃した。彼は理想社会のビジョンを調和に求めた。
- 123) 空想的社会主義（Utopian Socialism）；エンゲルスが規定した社会主義思想。資本主義社会が未成熟な段階の時期、その本質が明らかになった時点で、その本質に対して決定的な批判を加え、理想的な社会体制を構築しようとした。
- 124) ジャイコブ・ホリオーク（George Jacob Holyoake 1817-1906）；英国の社会改良家。
- 125) 前掲書9), p140,
- 126) カール・マルクス（Karl Heinrich Marx 1813-1883）；国際的共産主義の祖。ボン大学とベルリン大学で法律を学んだ。1848年に共産党宣言を完成させ、その中で国家は抑圧の道具であり、宗教や文化は資本家階級のイデオロギーだと攻撃した。1849年にロンドンに落ち着いてから経済学を研究し、『資本論』を書いた。
- 127) カール・マルクス著、長谷部文雄訳；資本論, p362, 河出書房, 1970年。
- 128) フリードリッヒ・エンゲルス（Friedrich Engels 1820-1895）；ドイツの社会主義者。
- 129) エンゲルス著、全集刊行委員会訳；イギリスにおける労働者階級の状態, 大月書店, 1992年。
- 130) 前掲書128), p222.
- 131) チャールズ・ディケンズ（Charles Dickens 1812-1870）；イギリスの小説家。法律事務所で下働き後に民法博士会館の議事速記者になり、22歳でロンドンの新聞記者になる。彼は小説中に多彩な人物を登場させ、その当時の社会悪を激しく批判した。小説『マーティン・チャズルウィット』ではギャング婦人という卑しい女性を登場させ、病院看護の実態を批判した。
- 132) Charles Dickens; OLIVER TWIST, ladybird Books Loughborough.
- 133) 新共同訳；聖書—旧約聖書続編つき, p3, 日本聖書協会, 1996年。
- 134) 前掲書132), p4.
- 135) 浅田順一他著；聖書, p399, 玉川大学出版部, 1964年。
- 136) 呉茂一著；ギリシャ神話上, p62, 新調社, 1992年。
- 137) 前掲書135), p61.
- 138) Lewis H.Morgan (1877); Ancient Society, (青山道夫著；古代社会, p278, 岩波書店, 2003年.)
- 139) ノルベルト・エリアス（Norbert Elias), 赤井慧爾他訳；文明化の過程, 法政大学出版局, 1995年。
- 140) ロック著、押村喪訳；教育に関する考察, p19, 玉川大学出版部, 1973年。
- 141) William James; Old Ways of Thinking, (榎田啓三郎訳；プラグマティズム, 岩波書店, p72, 1965年.)
- 142) フランソワ・ド・サンニャック・ド・ラ・モード・フェヌロン ((Francois de Saligmac de La Mathe Fenelan 1651-1715)；フランスの聖職者作家。彼は新カトリックの長としてプロテスタントの子女をカトリックに改宗する事、また既に改宗した子女達を再教育する事を任務としていた。
- 143) フェヌロン著、志村鏡一訳；女子教育論, 明治図書出版, 1974年。
- 144) 前掲書143), p9.
- 145) 前掲書143), p10.
- 146) ルイ14世（Louis XIV 1638-1715）；通称太陽王と呼ばれ、5歳で父の後を相続する。フランスの絶対王政の象徴としてまた、ヴェルサイユ宮殿にも象徴されるようにヨーロッパにおけるフランス文化の頂点にあった。
- 147) マルキエイズ・マントノン（Marquise Maintenon 1635-1719）；ルイ14世の愛人。1686年にサン・シールの学校を開いた。
- 148) ハンナ・モア（Hannah More 1745-1833）；父親は慈善学校の校長。姉妹達と協力して学校を経営しながら、文筆活動で名声を博し、自力で財産を築きあげて、ブルーストッキングのメンバーとなり、博愛主義をつなぐ輪として女性史上注目される。その一生は宗教的忍従と慈善を女性の義務の第一と考え、実践した。
- 149) メアリ・ウルストンクラフト（Mary Wollstonecraft 1759-1797）；フェミニスト。結婚後は

- Godwin. 職業を持つことにより, 女性も依存の生活から脱却し, 男性と平等の立場にたつと主張した.
- 150) ハリエット・マーティノウ (Harriet Martineau 1802-1876); 英国の女流小説家, 経済学者. デイリー・ニュースの主筆をしていた. 彼女は情報や知識を小説の形で出すことを思いつき, 数多くの物語を書いて政治や経済や救貧院の話などを解りやすく解説して好評を得た. 『フローレンス・ナイチンゲールの生涯』セシル・ウーダム・スミス著より
- 151) ハリエット・テラー (Harriet Taylor 1807-1858); 夫のテラー氏死亡後, ミルの妻になる. ミルが1869年に執筆した『女性の従属』は彼女の協力によるといわれている.
- 152) シャーロット・ブロンテ (Charlotte Bronte 1816-1855); イギリスの女流作家. 1835年母校のロウ・ヘッドの教師になったが, 辞めて家庭教師になる. しかし, これも直に辞めてしまう. エミリー (1818-1848), アン (1820-1849) の三姉妹で自分達の学校を作るつもりであったがこれも失敗した. 代表作『ジェーン・エア』
- 153) エリザベス・ブラックウエル (Elizabeth Blackwell 1821-1910); アメリカ初の女性医師. イギリス, エイヴァン州ブリistol生まれ. 様々な医学校に入学申し込みをするが断られ, ニューヨーク州のジェネバ医学校に入学, 1949年に卒業. 後, ヨーロッパへ行き, パリ産院, ロンドンの聖バーソロミュー病院で働く. 1851年にナイチンゲール宅を訪問し, 病院や看護師の問題に関して話し合っている. 同年, ニューヨークに戻り, 開業して成功する. 1869年からイギリスに在住し, ロンドン女子医学校を創設した. 妹にエミリーという世界初の女性外科医がいる. 彼女もロンドン女医学校の教授となるなど, 姉の事業に協力した.
- 154) 前掲書86), p426.
- 155) ルソー著, 桑原武雄訳; 社会契約論, p15, 岩波書店, 1991年.
- 156) 前掲書104), p165.
- 157) 前掲書88), p205.
- 158) 前掲書88), p205.
- 159) 前掲書88), p139.
- 160) 前掲書88), p211.
- 161) 前掲書88), p211.
- 162) 前掲書88), p216.
- 163) 前掲書88), p44.
- 164) 前掲書88), p232.
- 165) 前掲書88), p229.
- 166) 前掲書88), p227.
- 167) 前掲書33), p57.
- 168) 五島茂他編; 世界の名著42 オウエン, 『結婚・宗教・私有財産』, p294, 中央公論社, 1996年.
- 169) 前掲書88), p222.
- 170) 前掲書88), p225.
- 171) テューク・ウィリアム (Tuke William 1732-1822); クェーカー教徒の慈善家. ヨークで紅茶とコーヒーを商い, 精神病者のための施設を創設した. フランスのピネルと同じく精神障害者の新しい治療法と看護法を開拓した.
- 172) Michel Foucault (1972); Histoire De La Folie A L a ge Classique, (田村俣訳; 狂気の歴史, p494, 新潮社, 1975年.)
- 173) 前掲書88), p225.
- 174) 前掲書88), p226.
- 175) シモーヌ・ド・ボーボワール (Simone de Beauvoir 1908-1986); 実存主義の著述家でパリ生まれ. サルトルと共にソルボンヌ大学で哲学を学び, 同大学の教授となる.
- 176) ボーボワール著, 生島遼一訳; 第二の姓II, 新潮社, 1989年.
- 177) 前掲書9), p9.

- 178) リチャード・モンクトン・ミルンズ (Milnes Richard Monckton 1809-1885) ; イギリスの政治家、
 文学者。ロンドンのケンブリッジ大学で学び、若手政治家として抑圧された民衆、信教の自由、逃
 亡中の奴隷、女性の権利の擁護者として戦った。
- 179) 野田又夫編；世界の名著39, カント, 『人倫の形而上学』, p408, 中央公論社, 1976年。
- 180) イマヌエル・カント (Immanuel Kant 1724-1804) ; ドイツの哲学者。ケーニヒスベルクに生まれる。
 同地の大学に進み神学・哲学を学ぶ。後、1746年にケーニヒスベルク大学の私講師になり、1755年
 に同大学の論理学・形而上学の正教授となる。
- 181) 前掲書33), p68.
- 182) ウォルター・スコット (Sir Walter Scott 1771-1832) ; 英国の詩人, 小説家。エジンバラで学び弁
 護士となる。『湖上の美人』などのロマンス詩がある。
- 183) ジョージ・ゴードン・バイロン (George Gordon Byron 1788-1824) ; 英国の詩人。10歳までは貧
 しい環境に育つが、大叔父の称号を相続、ケンブリッジ大学に学んだ。放蕩な生活を送った後、『ハ
 ロルドの遍歴』で社交界の英雄になり、バイロンの概念をヨーロッパ中に広めた。
- 184) 前掲書2), p491.
- 185) ジョン・デューイ (John Dewey 1859-1952) アメリカの哲学者。プラグマティズムの大成者として
 概念道具説を主張し、新しい行動的ヒューマニズムによって、進歩主義教育の創始者となる。ヴァー
 モント大学を卒業、ジョンズ・ホプキンス大学で学位を取り、シカゴ大学、コロンビア大学の主任
 教授としてアメリカの哲学界のみならず、思想界全体を指導した。彼の哲学の根本特色は専門的講
 壇哲学で使われる専門用語や概念に習熟することから哲学を解放し、かえって、庶民の生活を一層
 豊かにすることに哲学を奉仕せしめようとする点にある。この態度は、哲学的真理を知ることが生
 きることの最高の意義であると考え方、古代、中世を通じて西欧を支配した主知主義的伝統、哲学
 の有閑階級的伝統からの決別を意味すると同時に知ることを科学に結びつけることによって、社会
 と人生のうちに知識を生かそうとする合理主義的立場の再建を意味する。
- 186) デューイ著、松野安雄訳；民主主義と教育、下、p246、岩波書店、1983年。
- 187) Florence Nightingale (1871); Introduction by Florence Nightingale [In] Memorials of Elizabeth
 Jones. By her sister. Florence Nightingale. London & Co, (湯楨ます他訳；ナイチンゲール著作集
 第三巻、アグネス・ジョーンズをしのんで、p244, 現代社, 1985年.)
- 188) エドモンド・スペンサー (Edmund Spenser 1552-1599) ; 英国の詩人。ケンブリッジ大学に学んだ。
 『妖精の女王』は9行連からなる韻文形式の著作であるが、最初の3巻が1590年に出版され、次の3巻
 が1596年、作者の死によって未完のままである。
- 189) エドモンド・スペンサー著、和田勇一、福田昇八饗共著；妖精の女王、筑摩書房、1994年。
- 190) 前掲書190), pp36-64.
- 191) ジャン・ジャック・ルソー著、永杉喜輔他訳；エミール、玉川大学出版部、1984年。
- 192) 前掲書88), p228.
- 193) 前掲書12), p115.

図1 Family Tree of Florence Nightingale's Parents



m = 結婚

(Ever Yours, Florence Nightingale Selected Letters 挿入図より筆者作成)